ISSN　1348－902X

自治医科大学看護学部年報

Jichi Medical School Annual Report of Nursing

第 1 号

2003

目　　次

○　**特別報告**

看護学部の開設とこれからの課題　看護学部長　野口美和子 ……3

自治医科大学看護学部の地域看護学教育
地域看護学教授　篠澤　倪子 ……7

看護における教育と実践のユニフィケーション
母性看護学教授　成田　　伸 ……11

○　**委員会等報告**

人事委員会　委員長　野口美和子 ……17
教務委員会　委員長　塚越フミエ ……17
学生委員会　委員長　髙村　寿子 ……19
FD・評価実施委員会　委員長　野口美和子 ……20
紀要年報編集委員会　委員長　渡邉　亮一 ……22
予算委員会　委員長　野口美和子 ……22
図書館運営委員会　委　員　永井　優子 ……23
臨床指導者研修会　担　当　成田　　伸 ……24

○　**教育研究分野別報告**

学部長 ……29
一般基礎 ……29
専門基礎 ……32
基礎看護学 ……33
地域看護学 ……35
精神看護学 ……37
母性看護学 ……38
小児看護学 ……40
成人看護学 ……41
老年看護学 ……42

○　**研究業績録**

学部長 ……45
一般基礎 ……45
専門基礎 ……46

基礎看護学 ……46
地域看護学 ……47
精神看護学 ……47
母性看護学 ……48
小児看護学 ……49
成人看護学 ……50
老年看護学 ……51

○　資　料

2002年度（平成14年度）年譜 ……55
教職員名簿 ……56

特別報告

看護学部の開設と今後の課題

学部長　野　口　美和子

１．看護学部開設の経緯と理念

１）申請と認可

自治医科大学は，昭和47年にへき地等の地域社会における医療の確保と向上，及び住民福祉の増進を図るため高度な医療能力を有する医師を養成することを目的として全国47都道府県により設置された。

自治医科大学看護学部は，平成14年4月に看護の分野において自治医科大学の建学理念を実現させるために，高い資質と倫理観を持ち高度医療と地域看護に従事できる看護職を育成することを目的として開設された。

平成13年4月，文部科学省に看護学部設置認可の申請をした。

施設は，看護短期大学の校舎を転用し利用するため3.5億円をかけ改修を行い，図書は看護の専門図書を中心として5,500冊（2,000万円）を新たに購入し補充した。

教員組織については，看護短期大学より移行する教員23名を含む就任予定教員37名で審査を受けた。

看護短期大学は平成13年4月の入学生をもって，専攻科は平成16年4月の入学生をもって募集を停止することとした。

平成13年12月20日，申請どおり認可された。

２）看護学部１回生の受け入れと教育理念・目標の設定

平成14年度第1回生を募集し，推薦入学試験および一般入学試験を行い，101名の入学者を決定した。入学式は平成14年4月5日に行われ，医学部第31回入学生とともに看護学部第1回生が入学許可された。

一方で，就任予定教員の会議を開催し，看護学部の教育理念と目標の検討を行った。

教育理念は，

⑴豊かな人間性を涵養することに力を注ぎ，生涯にわたって自己研鑽できる能力を身につけた看護専門職を育てる。

⑵看護に必要な専門知識と技術を身につけ，看護に関して判断，計画立案および実践と改善・改革ができる看護専門職を育てる。

教育目標は，

⑴人間としての感性を磨き，深い人間理解とコミュニケーションにより，かかわる人々の主体性を尊重する倫理的態度を養う。

⑵多様な状況にある人々の健康問題を確め，多様なアプローチを必要に応じて効果的に用い，その解決を図る専門的能力を身につける。

⑶保健医療・福祉における看護の役割を理解し，人々の健康と幸せの実現のために努力し，また関係者と協力する実行力を培う。

⑷看護実践にかかわる現状を把握し，改善・改革を導くための方法を理解する。

を設定した。

２．学部運営組織の編成

平成14年4月開催の第1回教授会において，学部運営組織を審議し決定した。教務委員会と学生委員会は１回生が卒業する平成17年度までは一般基礎，専門基礎，看護学の各領域の教授（欠員の場合は助教授）が両委員会に所属し，運営にあたることとした。

その後，それまで医学部のみの単科大学であった自治医科大学が看護学部を含めた2学部となったことにより，両学部で共同に運営する必要のある学内委員会の構成の見直しと学部運営上の必要性などから教授会運営組織の中に各種委員会が追加された（図1）。

３．開設後の課題と対応

１）4年制大学における看護学教育としてのカリキュラム運営と教育活動

学校教育法では大学の目的として「大学は深く専門の学芸を教授・研究し，知的，道徳的及び応用能力を展開させるための教育を行うこと」と定義している。４年制大学における看護学教育は，保健師，看護師，助産師の免許を有して活動する看護専門職に必要な知識，技術等を教授する，いわゆる総合看護学教育をするとともに，その学習

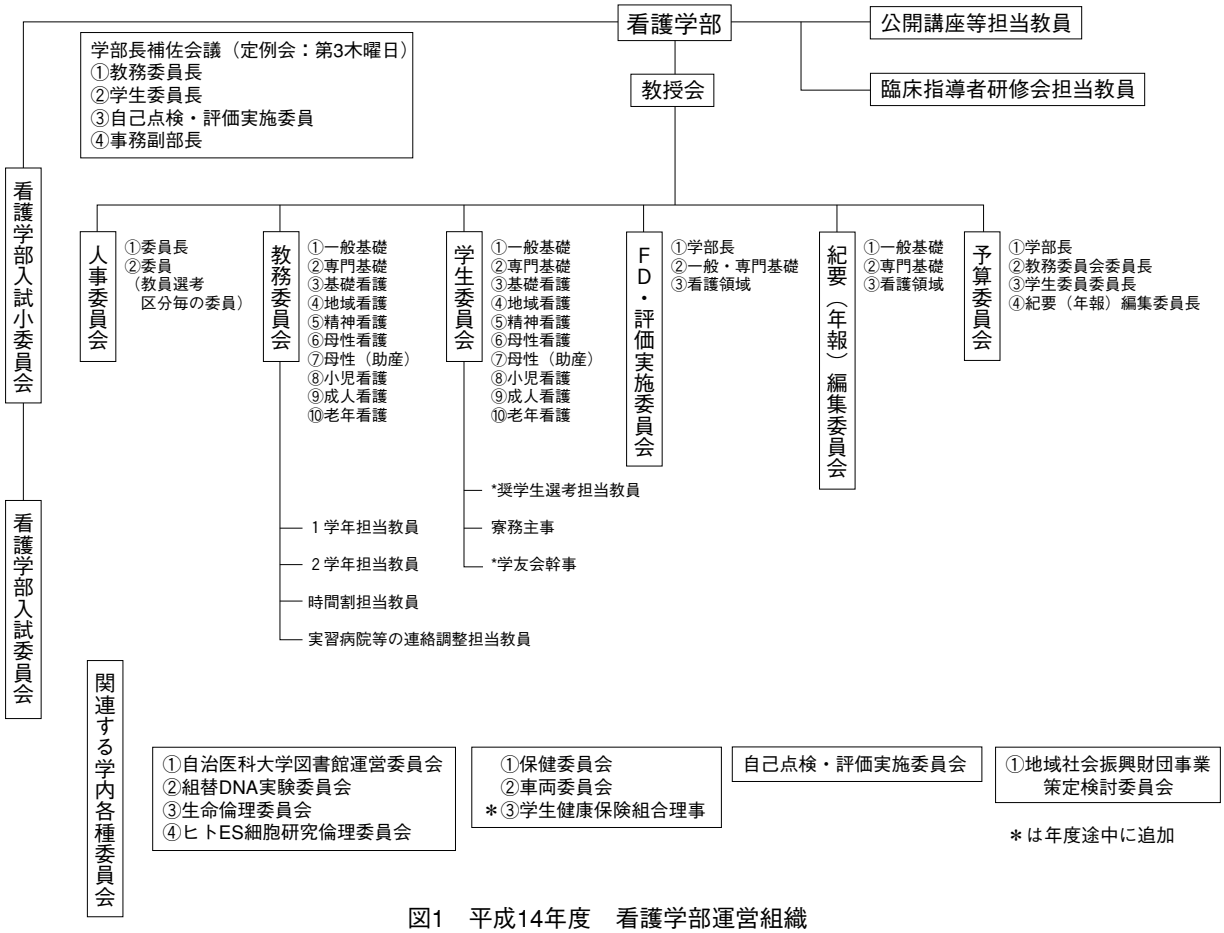

図1　平成14年度　看護学部運営組織

と将来を支える豊かな教養を培うことを目指している。

しかるに看護教育の急速な大学化の影響や看護とか看護学とか看護教育についての狭くあいまいな認識もあり，4年制大学における看護学教育の理念，目的が真に理解されにくい状況にあると危惧される。

看護教員の中にも看護系大学における教育プログラムは看護師教育養成課程としての3年に助産師，保健師養成課程としての1一年のカリキュラムをプラスするだけとの誤解をしている者もいるのが現実である。

本学部においては，まず，学部教育に関係する一人一人の教員が，また，関係する職員が学部の理念や目的を正しく理解し，深めていくことが大切だと考え，次の点について努力していきたい。

①カリキュラムを運営していく中で，授業内容と学部の理念との関係を一つ一つ確認しつつ理解を深めていく。

②各教員は学生が卒業時に修得を目指すものは総合看護を実践する能力であることを常に理解して教育にあたっていく。

③看護専門職に求められる多様な看護活動について学生に紹介する「看護学概論」は様々な看護経

表1　オープンキャンパスと入試状況

	オープンキャンパス	入試状況							
		推薦入試				一般入試			
		応募者	受験者	合格者	入学者	応募者	受験者	合格者	入学者
平成14年度	293人	13人	13人	13人	13人	376人	359人	101人	87人

験を持つ各分野の看護学教授が担当することとし，これを通じ，学生の学習意欲と目的意識を引き出す。
④学生による授業評価を導入して教員が各自の授業研究の発表を通じてその資質，教育力の向上を図るための継続した努力をする。

入学者選抜については，当面は多くの学生が応募してくれることを目指してオープンキャンパスを開催し，これに参加する高校生等のニードに対応して実施内容の検討・改善を行った（表1）。

しかし，学生の受け入れについては，自治医科大学看護学部がどのような大学として選ばれていくか，という課題としてとらえるべきであろう。学部教育の目的である看護専門職の育成において成果をあげ，それを社会に開示し認められていくことが最も大切である。このことについては医学部の4半世紀に及ぶ医師教育の成果に学ぶことが多いものと考える。

２）理念にそった臨地実習のための条件整備

⑴臨床指導者研修プログラムの開発

実践の学である看護学の教育において臨地実習はもっとも大切な教育方法であり，また，最も多くの学習時間を占めている。自治医科大学看護学部は特に実習を重視している。カリキュラム総単位に占める割合は18.4％であるが，時間で言えば総授業時間3,345時間のうち1,035時間で30.9％を占めている。臨地実習の中心的教育課題は看護実践の理解であり，看護をヒューマンケアとして体験することで，看護の対象者である患者や家族等関係者あるいは地域から直接看護の必要性を発見し，看護を実践すること，またそれを評価して看護を改善し，対象者の健康生活を支えぬくという合理的かつ倫理的実践の方法を理解することにある。そのためには行われる実践が本当に患者の健康，安心，安楽，自立，生活の質を支えるものとなっているかを一つ一つ点検し，改善している看護職の姿を示すことがまず必要である。実習指導にあたる教員もまた各実習施設の看護職もそのことをよく理解する必要がある。主な実習施設である自治医科大学附属病院では看護短期大学時代に臨床実習指導者の体制がとられ，臨床指導者研修プログラムが開発されていた。看護学部の実習指導も，そのままの体制でできるのではないかと考えられていた。しかし，学部教育が新たに開始されたのであるから，教育目標が異なれば実習の目標も異なる。自治医科大学附属病院の臨床指導者と指導の場が新たに整備される必要がある。そこで，学生の臨地実習指導に教員があたり，臨床指導者と協力して実習をすすめていく態勢を確立し，これに基づいて臨床指導者研修プログラムを開発した。

⑵実習計画策定調査

学部教育の目標達成のためには，総合看護を学習するにふさわしく実習の場も拡げる必要がある。特に最終学年の4年次に行われるフィールド実習はこれを目指すものである。

そのため，開学時より当面の間，実習計画策定調査費（21万円）を設けることとし，調査を実施した。これにより様々な看護活動の場において，学部学生の実習の受け入れを打診している。一部の施設では，その施設の看護の改善へ協力することを通して実習施設として教育環境の整備を行っている。地域医療を担う医師養成をしてきた自治医科大学の基盤があるので，生活に根ざした看護の基本を学ぶことができるへき地等地域の保健医療機関で実習ができるよう条件整備していく必要がある。

３）看護学研究の条件整備

⑴共同研究費による看護学研究の推進

大学では教育活動は研究活動と一体である。看護学部の教育理念を見ても，生涯自己研鑽し，また，看護の改善改革ができる看護専門職の育成を目指すとしている。教員自身が研究活動を通して看護の改善・改革に貢献する姿を示すことが大切である。

地域すなわち人々の生活に根ざした看護を実践できる人材育成は自治医科大学の看護学部の使命である。また，地域に根ざした看護を追及する姿勢は国際看護活動の理解と実行の基礎となる。

看護短期大学での教育・研究に携わっていた教員も多いことから，特に地域と人々の生活に根ざした看護学の追求を意図した研究を支援することが必要である。そのため，開学から当面の間「看護学領域共同研究費」を計上し，看護学の各領域から共同研究テーマと必要経費の申請に基づいて配分している。平成14年度のテーマと研究活動成果，費用の使途を報告している（表2）。

表2　看護学領域共同研究研究課題

1）知識創造と看護実践できる学生を育てるためのSECIモデルに基づく基礎看護学技術演習効果の研究
2）へき地における診療所看護活動の現状
3）自治医科大学附属病院におけるリエゾン精神看護実践の導入に関する基礎的研究－精神看護実践の現状とリエゾン精神看護へのニーズについて－
4）栃木県における母乳育児支援の実態調査
5）栃木県南部の１市4町（小山市・国分寺市・南河内町・石橋町・上三川町）における小児看護の課題－子供の健康及び医療に対する認識から－
6）自治医科大学附属病院の外来に通院する2型糖尿病患者のセルフケアの実態と生活に根ざした支援に向けた看護の課題
7）脳血管障害患者のセルフケアと地域生活（含家族生活）との関連

⑵看護実践に基づく研究の推進

開学当初，教員は様々な委員会を立ち上げ，参画するとともに，学部１回生の教育にあたる他，授業，実習の評価法等の確立に向けて努力した。その上，ほぼ全員の教員が短期大学との兼務となっていたので，大変忙しい日々を送っていた。共同研究費による研究も緒についたばかりであった。

この状況を反映して，平成14年度の文部科学省科学研究費の申請は12件にとどまり，採択されたのは3件であった（赴任前地からの継続または申請によるものは４件であった。）。科学研究費を獲得することの戦略上の技術もさることながら，それぞれの教員がそれぞれ専門とする看護実践に基づく研究テーマを持つことが必要である。

また，看護職との共同研究を念頭において，自治医科大学看護学部の紀要ではその投稿資格を拡大し，「自治医科大学に所属する看護職」と規定している。実習指導を行う病棟等での看護職との共同研究や将来フィールド実習の場として教育・研究する場を開発することが大切であり，その場合，大学の教員は研究費を獲得できる立場にあり，それを大いに活用してもらいたいと考える。

⑶実践活動のための環境整備

看護学部の教育・研究，特に大学院看護学研究科における教育・研究を念頭において，看護実践を通しての研究を進める必要がある。しかし，そのような研究環境が整っているかといえばそうではない。臨床系の医師教員は病院兼務で診療を担当しながら診療を通して臨床研究している。看護学の場合はそのようにはなっていない。だからこそ実践の場において看護職との共同研究を進めることが大切である。それと同時に，自治医科大学看護学部の開設の主旨からして現代の保健医療の課題，例えば医療の高度化，患者の高齢化，慢性疾患の増加等を受けて社会の要請に貢献できる実践的研究，改善運動に参加することを可能とするような体制が望まれる。看護大学における実践的看護研究の体制作りは，他の大学においてもさまざまに検討され，試みられたが，いずれも有効ではなく続いていない。看護教員の病院兼務や継続看護を支援する部署で，地域と生活に根ざした看護学の確立に向けて実践活動を検討すべきである。

また，研究を推進するにあたり，自治医科大学の倫理審査委員会からの支援を受けている。看護の実践的研究のための倫理的配慮を研究し，自治医科大学における看護学研究の推進を支えることも看護学部の役割と考えている。

４）大学院看護学研究科

自治医科大学の理念を看護学の領域で達成していくためには学部教育では十分ではない。特にへき地等において高度医療を支え，地域の人々の生活に根ざした看護を創出するためには，卓越した専門的能力を有する看護職とチーム医療体制の中で看護職に求められる調整機能を果たしつつ看護活動の組織化を図る高度な管理・行政的能力を有する看護職が求められる。

これら高度看護実践者の育成を目指し，実践看護学と地域看護管理学の2専攻から成る看護学研究科修士課程を立案した。平成14年11月の企画委員会で審議され，平成18年4月の開設に向けて大学院看護学研究科設置準備を開始することが承認されている。

自治医科大学看護学部の地域看護学教育

地域看護学教授　篠　澤　倪　子

１．はじめに

自治医科大学看護学部は，自治医科大学の建学理念を実現するために，高い資質と倫理観をもち高度医療と地域看護に従事できる看護職者を育成することを目的にしている。本学部の教育目標を踏まえ，地域看護を取巻く急速な環境の変化を受けて，本学部における地域看護学の教育のなかで何を大切に教育するかを述べたい。

筆者は，地域看護学は，地域で生活している様々な人々の健康レベルやQOLの向上にむけて行う看護の実践科学であると捉えている。また，地域看護学専門領域が扱う範囲は，地域住民を対象にした看護，学校看護，産業看護，そして在宅療養者看護であると考えている。大学教育においては，どの場に就業しても地域看護が実践できる看護職者を教育したいと考えている。

２．保健計画策定過程に参加し住民を主体にした活動を考える教育

2010年を目標に「21世紀における国民健康づくり運動」が平成12年から開始された。すべての国民が健康寿命を延伸し生活の質向上を目指して，自己の選択に基づいて健康を増進する時代となった。平成15年には健康増進法が施行され，世界的なヘルスプロモーションの潮流とともに，その個人の活動を社会全体で支援していく機運が高まっている。

保健計画策定は，「地域の健康状況の全体像の把握，科学的情報に基づいた分析を行い，その情報を住民と地域を支える人々と共有し，共同して地域の健康課題に取り組み，その課題に対する対策を立案・実施・評価し，新たな改善策として次の計画へつないでいく」という一連の過程であると言われている。

全国市町村活動協議会の平成14年度「健康日本21地方計画」策定市町村の実態調査によれば，約80％の市町村では，保健師がリーダーとなり，市町村職員や地域住民，関係機関と共同して計画策定を進めている。地域の看護職者には，地域で生活する人々が自分達の健康問題を考えられるようにすること，自分達が暮らしたい地域をイメージ化できるようにすること，実現するための条件整備やアイデアを出すことなどの活動が必要である。学生には，計画策定過程における看護職者の関り方を学ばせ，住民と目標を共有化することや住民と対等に話し合えることについて考えられる力を身につけさせたい。これらを臨地実習のなかで学生が学んでいけるようにする授業設計が重要である。

３．あらゆる看護の場面で予防的な支援の重要性を理解できる教育

人口の急速な高齢化に加えて生活習慣病の増加は，社会保障給付費のさらなる急騰に繋がり，将来の医療や年金行政に大きな不安を投げかけている。

前述した健康日本21の策定や健康増進法の制定は，生活習慣病などの疾病予防を積極的に推進し，生涯にわたって健康増進をサポートし推進することが期待されたものである。疾病や健康障害は，個人の身体的，精神的，社会的な影響に留まらず，個人を取り巻く家庭や地域にまで大きな影響を及ぼす。健康障害や寝たきりになってからの対策よりも健康状態の高い段階での対策がより重要である。

こうしたなかで，平成15年9月16日に開催された，第7回国保再編・統合推進委員会において，厚生労働省から，平成13年度老人医療費実績で「老人ひとり当たり外来医療費の相関係数では人口10万人対の保健師数と基本健康診査受診率がマイナス〔医療費の引き下げに作用〕の相関関係をしめしている」と提示された。このことは，看護職者の行なう予防活動が多大な効果を発揮することを示唆しているものと捉えられる。

したがって，地域看護学においては，集団を対象にした予防活動を優先して行える能力の育成が重要である。この考えを基に，子どものときからの生活習慣の指導や虐待に繋がるハイリスク者対策，感染症予防や生活習慣病から慢性疾患への移行防止，寝たきりにならない予防対策，災害や感

染症対策等の危機管理対策など，様々な健康レベルや健康問題における予防的活動を理解し，予防的意義の高い活動が実践できる力を養える教育をしたいと考えている。

４．地域で生活する人々の生活の実情が把握でき，生活に即した支援ができる教育

人々は自然・文化・社会環境などの影響下にあって，先祖代々の文明を受け継ぎ，一緒に暮らす人々と折り合いをつけながら生活している。その長年の生活は，住んでいる地域によって様々な健康状態を呈し，疾病予防や健康の回復の仕方も異なってくる。地域で暮らす人々の健康を考える上で，地域の生活の実情を把握する意義は大きい。

臨地実習において，学生は地域の人々の生活の実情を把握することにより，障害や病気を持ちながら，その人らしい生活を送っていることに気付いたり，長年の生活習慣や人との関わりが病につながっていることに気付いたりすることができる。

また，個人の健康問題の解決には，その家族や近隣および地域全体に対する環境の改善や人々の慣習や生活習慣の見直しなどの取り組みが重要である。このような学びによって，施設内において患者のニーズに即した看護を行い，患者がどのような環境でどのような人々とどのような暮らしをしてきたかを推し量ることができる。

さらに，同じ悩みを持つ患者の動向や地域に共通した生活習慣による健康問題など，施設で把握したことを地域に提言し，地域の看護職者と共同で看護を考えていくことが重要である。地域住民のありのままの生活を把握して，その生活と健康の関わりを考えながら，その生活に密着した支援活動ができるような力を養わせたいと考えている。

５．上述の教育を踏まえたプライマリ・ヘルスケアを実践できる教育

筆者は，昨年離島や山間地にいき，そこで働く看護職者に面接し，へき地診療所の看護活動の現状を調査した。看護活動の内容は，診療の介助と日常生活への支援が中心であったが，顔見知りの患者が多く，患者の性格や生活状況を把握して指導を行ったり，家族に迎えの連絡をしたりするなど，交通が不便である地域の生活に配慮した看護が実践されていた。また，看護活動を通して患者および家族の生活行動や価値観，福祉サービスの利用実態などを把握し，これらの情報を蓄積して地域に共通する問題としてとらえていた。

例えばある島では，その島の歴史や価値観が，痴呆老人等高齢者の理解不足や介護のしにくさなどに繋がっているということを看護職者が理解しており，痴呆老人や高齢者が可能な限り地域で生活するには，地域住民に痴呆症や老化についての正しい知識と高齢者へのかかわり方を教育する必要があると認識し解決したいと考えていた。

しかし，その一方で，看護職者はこれらの地域に共通する健康問題状況を把握してはいたが，関係機関との積極的な連携は少なく，問題の共有化がなされていない状況であった。住民の最も身近にいる診療所看護職者が関係職種や機関と問題を共有化し共同で進めていく能力を身につけ，健康教育などの集団を対象とした働きかけの方法など，その地域にあった看護活動を創り上げ対応していくことができたら，へき地住民のヘルスニーズに十分に応えることができるものと考えられる。

へき地診療所看護職者は，子供から高齢者まで様々な健康問題に対応できるジェネラリストとしての知識，技術を用いた活動を行うことが求められており，前述した2～4の教育を踏まえたプライマリ・ヘルスケア能力を身につける教育を行いたいと考えている。

６．ヘルスケアチームと資源の創設などが考えられる教育

国民の医療ニーズの高度化，多様化と併せて，平成12年に第4次医療法改正が行われ，そのひとつとして在院期間の短縮化が進められている。「平成14年度看護政策立案のための研究報告書」のなかの退院患者約4,000名の動向調査の結果によると，退院患者の90％は在宅に移行し，そのうちの17％は高度な医療を必要としていた。その17％の患者のうち訪問看護利用予定者は7.9％であった。在院日数の短縮が進み，医療ケアが必要な患者が退院するなかで，病棟での看護職者には，家族形態，家屋の構造，仕事，生きがいなど退院後の患者の生活を考慮した支援が求められている。

これと平行して，病院外来で通院を続けながら在宅療養をする患者も増加し，仕事や学業などと両立させながら社会生活を送ることも多くなっている。生活の場である学校や職場や地域において患者を支えるためには，それぞれの場の看護職者

と連携し共同で援助を行う必要が生じている。

また，保健・医療・福祉・教育・心理などの幅広い分野にわたる専門職種のみならず，家族・隣人・ボランティア・健康推進員・母子保健推進員・民生委員などの非専門職を含めた人々とヘルスケアチームを組んだ援助も必要になる。そのため，多様なニーズに応えられるよう様々な職種や関係機関と連携をとることやケアチームづくりができる力を身につけさせる必要がある。

さらに，この基礎教育の上に立つ大学院修士課程の教育では，住民のニーズに合わせた資源やシステムの創設をしたり，既存資源の評価をしたりして看護活動を展開できる指導力，研究開発力，企画力などの能力を養い，高度な看護を実践できる看護職者の管理者をめざす者を育成したいと考えている。

７．看護実践から学ぶ基本的人権の尊重と人権擁護

平成12年の介護保険の施行は社会保障構造改革の第一歩である。その改革とは，これまでの行政庁が判断してサービスを提供する措置制度から，利用者自らが選択し，サービス提供者との契約によりサービスを利用する制度へと移行したことである。それに伴い利用者が選択できるような情報の提供，選択できない者への権利保護など利用者の権利擁護が強く打ち出された。保健，医療，福祉活動のどの現場においても，利用者中心のサービスを実施していく上でインフォームド・コンセントやインフォームド・チョイスの実現がこれまで以上に必要になってきている。国民が主体的に健康づくりに取り組むことを支援する環境づくりや生涯にわたって一貫した支援体制を構築する計画策定も住民参加が不可欠であり，住民の権利擁護のひとつと考えられる。

一方，健康日本21を法制化した健康増進法では，健康日本21地方計画の策定を促すための基本方針の他に，体系の異なる健診データを標準化する指針も含まれており，産業保健，学校保健，地域保健，医療などとリンクする場合の個人情報の保護が課題となっている。保健，医療，福祉，教育などに働くそれぞれの看護職者が，継続した，一貫性のあるサービス提供を図るためには個人の健康情報へのリンクが必要である。国民にとっては，個人ごとの継続した健康状態の把握のもとに，より適切な看護援助が行なわれる反面，自分の情報を自分でコントロールできる権利が侵されてしまう危険性もはらんでいる。

看護実践にかかわる倫理の原則，基本的人権の尊重，意思決定の擁護，人権擁護者としての理念などについて，具体的な看護事象のなかで学習できるようにしたい。

８．まとめ

以上の6つの教育課題を実現するために，臨地実習など本格的に始まる平成16年度に向けて，教材の精選など，最終的な調整を行っているところである。

今後，地域で生活している様々な人々の健康レベルやQOLの向上にむけて看護実践の場において改善・改革が推進できる看護職者を教育するとともに，豊かな人間性に基づく倫理的判断力を育む教育の充実に一層努めていきたいと考えている。

文献

１）日本看護系大学協議会学長・学部長会：21世紀の看護学教育　21世紀に求められる看護学教育－高度な看護実践の実現に向けて－．財団法人大学基準協会，p91-125，2003.

２）平山朝子：地域看護学の発展と教育の役割．日本地域看護学会誌，12(1);5-10，2000.

３）平山朝子：地区活動論；公衆衛生看護総論11．日本看護協会出版会（東京），p3-115，1999.

４）金川克子：地域看護学のストラテジー－地域／集団を基盤にした地域看護活動に焦点をあてて－．日本地域看護学会誌，11(1);5-10，1999.

５）金川克子：大学・大学院における地域看護学教育と研究．保健の科学，141(1);24-28，1999.

６）野口美和子ほか：大卒看護師に何を求め，どう活かすか．看護管理，13(7);596-611，2003.

７）吉田千文ほか：臨地における看護実践能力の到達度評価方法．Quality Nursing，19(6)，2003.

８）野村陽子：最近の地域保健行政と保健師の活動方法．保健の科学，45(5);327-332，2003.

９）鈴木久美子，篠澤倪子，島田由美子：へき地診療所における看護活動の現状．日本地域看護学会第6回学術集会講演集，156，2003.

10）厚生省：厚生白書1999年版－社会保障と国民生活－，1999.
11）厚生労働省：厚生労働白書2003年版－活力ある高齢者像と世代間の新たな関係の構築－．2003.

看護における教育と実践のユニフィケーション

母性看護学教授　成　田　　伸

１．看護におけるユニフィケーションとは何か

看護における教育と実践のユニフィケーションは，1970年代にアメリカのいくつかの大学で初めて取り入れられたものであり，日本においても1995年に茨城県立大学医療大学で初めてこのモデルが取り入れられ，注目を浴びた[1]。岩井[2]は，看護における教育と実践のユニフィケーションが取り入れられてきた背景として，看護の大学教育化に伴って起きてきた「看護教育と看護の実際との深いギャップ，分離」があると述べている。

このような教育と実践の分離を解決する方策として取り入れられてきた看護における教育と実践のユニフィケーションは，臨床と教育の場が連携された組織となり，看護教員が病院の臨床の責任を持ち，臨床スタッフが看護大学の教育に関わるもの[3]をいう。ユニフィケーションとは，ただ単に学校の教員が臨床現場で働きながら臨床実習を直接指導し，臨床スタッフが大学で講義を行うことを意味しているのでない。岩井[2]は，ユニフィケーションの定義を「コスト効率のよい優れた看護を提供するために，教育，研究，実践が一体化するような組織構想ということ」と述べている。すなわち，ユニフィケーションとは，大学の教育研究能力のトレーニングを受けた教員の能力を看護実践の現場で活用し，看護実践現場でケア提供に日々研鑽を積んでいる臨床スタッフの臨床実践能力を教育現場で活用するという相互乗り入れによって，看護教育・看護研究・看護実践というそれぞれの場の改革に双方が協働して取り組む活動といえる。

２．ユニフィケーションの形態

先に述べたように1995年に茨城県立医療大学において日本で初めてこのモデルが取り入れられてから8年以上経過し，このモデルを取り入れる看護系大学は増している。各大学が独自性を持って取り組んでいるが，その中でもユニフィケーションの形態は大きく2つのタイプに分類できる。

１）看護系大学と医療施設とのユニフィケーション

この例としては，茨城県立医療大学以外に，聖路加看護大学[2]，青森県立保健大学[4]があげられる。茨城県立医療大学や聖路加看護大学は，医学部を持たない医療系大学として大学に附属した医療施設を持ち，その附属病院との間でユニフィケーションを行っている。青森県立保健大学は大学独自の病院は持っていないが，県という同じ設置主体である複数の県立病院との間にユニフィケーションのシステムを構築している。このようにある程度設置主体を同じくしている場合には，教員・職員の移動や兼務にも大きな支障がない状況にある。その上で，個々の教員がそれぞれ専門とする臨床現場に入り込み，自らの臨床実践能力の研鑽に励むとともに，臨床現場の改革に取り組んでいる様子がそれぞれの実践報告から伝わってくる。

また，聖路加国際大学や青森県立保健大学の場合，看護管理を専門とする看護教員がいることもプラスとなっている。それぞれの領域を専門とする教員が相当する臨床現場に入り込み臨床実践を現場から改革するだけではなく，看護管理のトップ層と一体となって，病院の組織・機能改革に取り組むことが可能となる。

２）看護系大学と地域とのユニフィケーション

この例としては，前原ら[5]が報告した三重県立看護大学があげられる。三重県立看護大学は大学の附属機関として地域交流研究センターを持ち，地域との交流を通して研究活動を行っている。地域交流センターの役割は，行政と看護実践の現場とが連携し，その地域をより具体的に的確に把握することにより，実践の場に即した看護支援方法を開発しようとするもので，大学の教員が7箇所の県民局をそれぞれ担当してそれぞれの地域に合ったプロジェクトに参加し，成果をあげている。

また，三重県立看護大学のユニフィケーションは地域の行政機関や保健センターとの交流に留まらず，各地域の中核となる医療施設でのスタッフ教育等の支援活動にも参加しており，特徴的である。

３．自治医科大学看護学部におけるユニフィケーションの展望

自治医科大学看護学部は，自治医科大学の「へき地等の地域社会における医療の確保と向上，及び住民福祉の増進を図るため高度な医療能力を有する医師を養成する」という建学理念を看護の分野において実現させるために，高い資質と倫理観を持ち高度医療と地域看護に従事できる看護職を育成することを目的として開学した。

本学部の場合，医学部の臨床教育の場として自治医科大学附属の病院をすでに持っている。看護学の教育においても，附属病院は医療施設内で濃厚な医療ケアを必要とする対象者に対する看護を学ぶ場として重要である。また，大学病院は急速に急性期専門の医療施設へと変貌しており，不安のない入院・スムーズで支障のない退院には，外来はもちろんのこと地域を取り込んだ連携が重要である。先進医療と地域連携の双方を学べる場として，この病院との連携は第一に考えられるべきである。

しかし，本学部の建学理念を考えた場合，そのような場だけでは，学生の学ぶ場，そして卒業後に活躍する場としては不十分である。自治医科大学は開学以来多くの医師を卒業させ，その若手医師たちがへき地医療の担い手として活躍してきた。義務年限終了後もへき地に留まり医療を提供したり，その地域全体の医療計画作成に参画したりとその活躍は続いている。建学理念を共有する看護学部学生の学びの場として，自治医大卒業生たちが作り上げてきたそのへき地医療の場も共に重要である。へき地では地域唯一の医療施設と周辺の地域との関係性が密であり，地域住民全体の健康を考慮に入れた保健・医療ケアの実践や地域保健計画の立案・実践に取り組むことが可能である。困難な点として地域的に離れていることであるが，IT技術の活用も考慮に入れたこのような場と実践的にユニフィケーションできるような対策も必要であろう。

本学部のユニフィケーションにおいても，めざすところが看護実践の改革，看護教育の改善，看護研究の推進の3側面であることは変わらない。しかし，上記のように考えた場合，本学部におけるユニフィケーションは，先にユニフィケーションの2つのタイプとしてあげた例を超えた幅広いものとして考えていく必要がある。

本年より臨床指導者研修会が内容を一新して開始された。その詳細は，「臨床指導者研修会」に関する委員会報告を参照いただきたい。臨床との協同での開催という臨床指導者研修会は，本学部の前身である看護短期大学時代に始められた[7]。しかし，今回の臨床指導者研修会の変更は大学らしい臨床教育の場を臨床現場と共に作り上げていくための大幅な変更である。この取り組みは看護教育の改善というユニフィケーションの取り組みのひとつである。また，大学全体あるいは附属病院の各種委員会に教員が参加しており，大学および附属病院の改革にも徐々に参画しており，看護実践の改革というもうひとつのユニフィケーションにも着手しつつある状態にある。

さて私は先に，助産師がウィメンズヘルスの領域で先駆的に実践していくためのモデルとして，看護系大学との協働での研究的な看護実践の取り組みの提案を行った[8]。現状の助産師の日常的なトレーニングの場は分娩介助を中心としたものであるが，ウィメンズヘルスのような新しい発想で女性の健康を支援するケアを提供できるかという点ではそのトレーニングは十分ではない。この現状を変えるための取り組みとして提案したものである。

図はそのような取り組みをモデルとして示したものである。まず，「先駆的モデルを実践できる

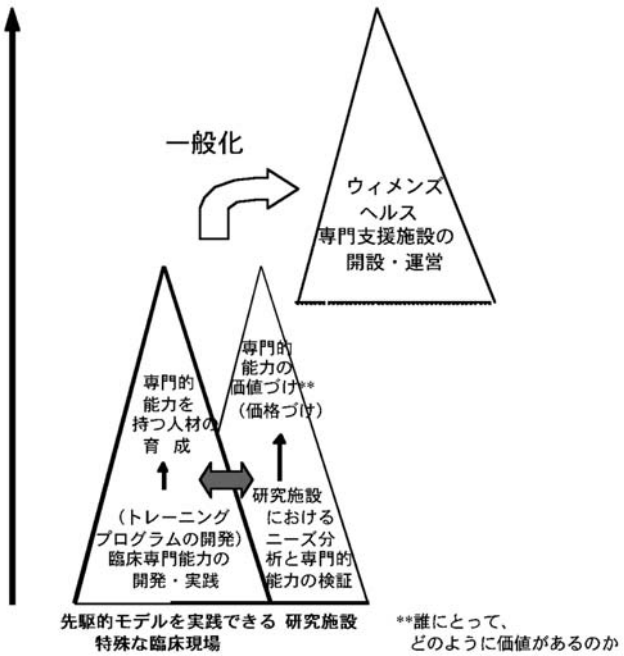

図　専門的能力の開発とその展開の関連図

特殊な臨床現場」（先駆的臨床現場と略）で臨床専門能力の開発・トレーニングを行う。開発したスキルは研究を通じた検証作業が必要であり，その協働する組織として看護大学等の研究施設がある。研究施設では，臨床現場での実践を通じて，ニーズを分析し，ニーズに合った専門的能力の開発を行う。開発したスキルは臨床現場で実践・検証を行う。臨床現場と研究施設間で双方向性の交流を持ってはじめて，専門的能力が誰にとってどのように価値があるかを実証できる。また臨床現場では，開発した臨床能力をトレーニングするプログラムを作成し人材を育成する。このように開発され社会に認知されたスキルが一般化され，育成された助産師によって，将来的にウィメンズヘルス専門支援施設が開設・運営されるというものである。

このモデルでいう先駆的臨床現場というのが，本学の場合，大学病院やへき地の医療施設などの医療施設であり，その医療施設を中心とした地域である。このような活動は，助手を含め看護学部の看護教員の取り組みが可能であり，看護教員自身の臨床能力の開発ともなる。このような個々の取り組みがユニフィケーションという活動の土台となっていくことだろう。

このモデルで「協働」と表現している部分が本題で掲げたユニフィケーションを意味している。しかし，ユニフィケーションは単なる個々の教員の研究的取り組みだけでは十分ではない。そこには組織的な取り組みが必要である。看護学部全体が組織的に取り組んでこそ，ユニフィケーションの本来的な意味を成すことになる。そのような強力な取り組みを期待したい。

４．おわりに

以上様々述べてきたが，本学部のユニフィケーションに向けての取り組みはまだ始まったばかりであり，十分な状態ではない。

従来医学部は附属病院を持っており，その附属病院は医学者の臨床実践の場であり，医学生や研修医の教育の場でもあり，医学研究者の研究の場でもあった。看護職がいまさらながらにいうユニフィケーションが古くから行われてきたといえよう。

看護は実践の科学であり，看護ケアを行っている臨床現場を離れては成り立たない学問である。私たちも優秀な次代を育成するために，医学部に学び，先駆的看護系大学に学んで，よりよい臨床の場を協同して作り上げていくための努力が期待される。

引用文献

１）高田法子，平岡敬子：ユニフィケーションモデル（Unification Model）の検討－臨床と大学の連携と協働の可能性－．看護学総合研究，2(2);1-8，2001．

２）岩井郁子：聖路加国際看護大学と聖路加国際病院のユニフィケーション．看護管理，6(9);634-637，1996．

３）阿部俊子：大学教育と臨床指導－ユニフィケーションシステムなどから－．看護教育，37(13);1146-1149，1996．

４）上泉和子：組織づくりと関係者への働きかけ，その実際．看護教育，41(7);500-505，2000．

５）前原澄子，川野雅資：地域と看護大学のユニフィケーション－三重県立看護大学附属地域交流研究センターの理念と活動－．看護教育，39(7);548-550，1998．

６）堀江妃佐子：看護相談室の可能性－大学と病院のユニフィケーション－．看護管理，10(9);719-722，2000．

７）齋藤ゆみほか：実習教育のための臨床と教育の場の連携に関する試み－臨床指導者教育の取り組みとユニフィケーションへのプロセス－．Quality Nursing，7(9);37-48，2001．

８）成田　伸：日本におけるウィメンズヘルスケアの展開－助産婦の立場から．助産婦雑誌，55(5);9-13，2001．

委員会報告

人事委員会

委員長　野口美和子

自治医科大学看護学部教員の選考手続・資格基準規定（平成14年度規定第16号）に基づき「自治医科大学看護学部教員の選考方法等に関する内規」を設定した（平成15年1月12日）。これは看護学部教員の選考方法等の実施に関して必要事項を定めたものである。

平成15年1月23日　人事委員会

退職する教員（助手）を補充するため「自治医科大学看護学部教員の選考手続・資格基準規定」に基づき選考申請書類が提出された助手候補者3名（小児看護学領域１名，母性看護学領域2名）を選考した。

平成15年2月27日　人事委員会

平成15年度の看護学部教員体制を整えるため「自治医科大学看護学部教員の選考手続・資格基準規定」に基づき申請書類が提出された助手候補者1名（地域看護学領域）を選考した。

内規では選考する教員の区分別に委員会の構成を定め，委員長は学部長をもってこれに充てるとした。

また，看護学部が完成する平成18年3月31日までの間において看護学部の専任教員（助手を除く）を選考する場合は，文部科学省における教員資格審査を受け，パスすることが必要となるため，この内規は適用しないと明記した。

教務委員会

委員長　塚越フミエ

平成14年度教務委員会活動の概要

本委員会は，平成14年5月にメンバーが決定した。それ以後の委員会活動の概要を記載する。毎月第１木曜日，午後1時15分を定例会議として開催した。終了時間は議題の内容によって異なった。以下に各月の議題と決定事項を報告する。

5月　教務委員会の年間スケジュールおよび教務委員会内の役割分担を決定した。時間割担当を永井教授，実習病院等調整担当を川崎教授が担当することとなった。実習計画策定調査費の配分について審議し，看護系の教授で話し合うことが合意された。報告事項として，①1年生の選択履修科目である「歴史と人間」の非常勤講師の変更があり，余語講師（専任）が担当することとなった。②本大学で開催される第23回アジア医学生国際会議への看護学部生の参加が可能となった。③病院看護部で開催される高校生対象の「ふれあい看護体験」後に本学部を案内することについて協力依頼があった。その他として，①中間試験を実施するかどうかは科目責任者の裁量で決める。②成績評価は4段階（優，良，可，不可）で記載し，点数は残さないことに決定した。精神看護学実習室が設置されてないので，設置の検討について要望が出された。

6月　前期定期試験について，科目責任教員に対して試験実施について調査する。実施科目数が多ければ2日間の予定を3日間に延長することを決定した。役割分担の追加として，学生の教授方法評価実施検討を篠澤教授と野中助教授，既修得単位認定方法の検討を川崎教授と竹田教授，編入生受け入れ準備を川口教授と成田教授，科目等履修生受け入れ準備を永井教授と神山助教授が中心となって各々原案を作成することとなった。

7月　前期定期試験の時間割を確認した。科目等履修生受け入れ規程の原案について討議し，1年ごとに更新すること，履修方法は看護学部履修規程に準じることなどを決定した。時間割を編成する上で必要な教務委員会のルールを決めた。また4年間の授業時間割シミュレーションを作成するためにすべての教員の都合を調査することとなった。その他として，編入生受け入れ作業の検討と基礎看護学実習Ｉの実習担当教員の不足問題が提起され，小児看護学と老年看護学の講師に依頼することが了承された。

9月　前期定期試験結果と再試の実施について検討した。編入生受け入れに関する検討および既修得科目認定に関する規程（案）について検討した。科目責任者に対する時間割，科目等履修開講の可否に関する調査結果が報告された。その他として以下のことを討議し決定した。

①試験問題の提出締め切りが間に合わない場合に

は，教員が印刷をする。
②休暇中の学生レポートの提出方法は，学事課宛に送るのではなく，直接教員宛にする。提出ボックスは3階の教員用を利用する。
③試験扱いのレポートは成績評価の締切日に間に合うように評価結果を提出する。
④学生への成績発表は9月13日とする。
⑤授業変更はできるだけ行わないようにし，やむをえない場合には教務委員長に書面で提出する。
⑥10月のガイダンスの内容（履修方法，レポートの提出方法，履修届け・取り消し，実習に当たっての心構え等）を確認した。
　教室の黒板の汚れや教室内に私物が放置されている，AVスイッチを入れたままであるなど，学生の学園生活に対する問題が提起され，討議した。

10月　前期定期試験の結果および単位の修得状況（登録科目は全員取得）の報告があった。来年度の時間割編成および4年間の時間割シミュレーションを基に外来講師への協力依頼等について審議した。外来講師との調整と学生への紹介を円滑に進めるために，開講区分ごとに責任者を配置することになった。自己と他者：髙村教授，情報とコミュニケーション：渡邉教授，身体システム：竹田教授，健康と疾病・障害の概念：竹田津教授，生活と社会のシステム：篠澤教授および余語講師，総合科目：塚越教授と決定した。編入生受け入れに関する規程，既修得科目に関する規程案に対する審議を行った。図書の選定について（雑誌と書籍）アンケートの結果による優先順位を決定した。その他として，基礎看護学実習Ⅰのシラバスの変更に関する報告があった。今後の課題である実習要項の印刷方法，1年ガイダンスの計画について検討した。

11月　平成15年度学年暦を承認した。また，来年度の学年暦によって授業時間数の考え方の変更があり，授業の最終コマを試験とすることになった。編入学生受け入れ，購入図書の選定と指定図書の考え方について，継続審議を行った。その他として，
①来年度のシラバスを授業時間数カウント変更に伴い再依頼する。
②補助科目責任者は本年度から活動することを依頼する。
③学生実習衣の検討を始める。
　鍵がかかるレポート提出用ボックスの要望を事務局にし，3階に設置された。必要時臨時教務委員会を開催することが了承された。後期開講科目の履修状況が報告された。

臨時教務委員会
　早急に時間割の決定をしなければならないため11月14日に臨時教務委員会を開催した。
平成15年度学年暦の変更（同意事項）
①定期試験期間の最初の1日目を補講日とする。
②後期授業を9月27日（月）から開始する。
③12月24日から冬季休暇とする。
④前期再試期間を９月8日から10日とする（発表は9月17日）。
⑤前期・後期ともに定期試験前に補講日を設け，時間数の不足はここで補う。

12月　時間割変更，「基礎看護学実習Ⅰ」を病欠した学生の追実習，時間数のカウントの変更によるシラバス作成依頼，短大時代の指定図書棚の廃止等について審議し決定した。実習要項作成方針について検討し，4年間の実習要項はバインダーを利用することで合意した。詳細については看護系教授の集まりで検討する。今後，看護学生実習衣の見直しをする。科目等履修規程（案）が提出された。その他として，臨床指導者会のメンバーとして実習調整を成田教授に依頼することになった。文部科学省主催「平成14年度看護教育ワークショップ」の参加報告が永井教授からあった。

15年1月
　既修得単位認定規程案を決定した。今後は，学則に則り事務処理をすることになった。編入学生履修案の検討，4月オリエンテーション計画案の検討，図書委員より希望図書がほぼ全部購入できたという報告があった。その他として，看護学生実習衣デザインの紹介があった。

2月　実習とカリキュラム改訂に関する考え方について野口学部長より説明があった。後期定期試験スケジュール，試験監督者決定，来年度の1学年担任を髙村教授（留任），野中助教授（新）に，2学年担任を川口教授（持ち上がり），西岡助教授（新）に依頼することになった。今後もこの方式

で学年担任を決定する。新学期図書館オリエンテーション案の検討と承認，新学期オリエンテーション最終案の提出，来年度の時間割変更として2年次の「基礎看護学実習Ⅱ」,「成人看護学実習Ⅰ」のオリエンテーションを空き時間に組み込むことが了承された。実習における感染症と事故対策マニュアル作成のための検討内容案が提出され，今後引き続き検討を進めていくことが了承された。教務・学生合同委員会を年2回定期開催することが了承された。その他として，看護部と共同で臨床指導者教育の改革を進めている。時間割変更の確認，実習衣について，実習病院の見直し，予算等については8月までに計画を提出する必要があることや1年生１名の追実習の報告などがあった。

3月　1年生の休学中の学生より提出された休学期間の延長願について審議し，了承された。時間割の交替，図書館のオリエンテーションの日程と方法について討議し，決定した。進級判定のための臨時教務委員会を3月25日に開催することを決定した。今後の成績管理について事務局よりフォーマットが提案され，了承された。その他として，4月のオリエンテーションについて確認した。報告事項として，新実習用ユニホームと時間割の確認，臨床指導者教育が新しいカリキュラムで来年度より開催されることが報告された。

第１回合同委員会の開催

1）4月のガイダンスの内容と役割分担等について討議する必要があり，1月30日に開催した。討議内容は次のとおりである。1年生のガイダンスは，学部長，教務委員会，学生委員会，事務，寮関係の順に行う。2年生は，学部長，教務委員長，学生委員長は各10分の挨拶とし，ガイダンスは学年担任が行う。

2）実習における感染症対策について看護学部対応システムを構築し，フローチャートを作成して実習要項に盛り込むことが合意された。

まとめ

本年は初年度であったことから，カリキュラム運営上にかかわるさまざまな事項に関する教務委員会内の約束事や4年間の時間割シミュレーション，来年度の時間割編成，シラバスの修正，学年暦の作成，定期試験と再試験の実施などの検討と実施をした。また，翌年度に向け新しく既修得科目認定の原案作り，編入生受け入れの準備，科目等履修生を受け入れるための規程の原案作りを行った。またそのために，すべての科目責任者に対して，科目等履修生受講の許諾についてのアンケート調査を行う等，多くの課題事項について討議し，1年間を終了した。新しい組織でシステム上の不備もあったが，徐々に教育基盤は築かれつつある。

学生委員会

委員長　髙村寿子

平成14（2002）年4月の看護学部開学に伴い，4月26日に開催された第1回看護学部教授会にて看護学部学生委員会が設置された。所轄事項は，1. 学生の厚生補導に関する事項，2. 学生相談・就職対策などの関する事項，3. 学長賞の選考に関する事項，4. 看護学生寮の管理運に関する事項，5. その他学部長が必要と認めた事項である。その他関連する学内各種委員会として，1. 保健委員会，2. 車両委員会がある。

これらの事項を審議検討するために，毎月第2木曜日の午後1時15分からを定例開催日とし，初年度は10回開催した。また，委員会構成は表1に示すように，委員長1名，各領域代表者8名および看護学務課の2名である。委員会での各委員の役割は，表1に示すとおりである。

また，平成14年度の学生委員会で審議検討された議題は，表2に示すとおりである。開設初年度ということで，まずは委員の役割分担から始まり，学生生活の基盤となる入寮許可，経済的支援の奨学生の選考，そして心身の健康を管理していく体制が審議検討された。通年を通じて最も審議検討

表1　学生委員会の構成および役割

委員名	領　域	役　　割
髙村　寿子	一般教育	委員長・奨学生選考・学年担任
竹田　俊明	専門基礎	学生健保理事
野中　　靜	基礎看護学	
篠澤　俔子	地域看護学	車両委員・寮務主事
永井　優子	精神看護学	保健委員
川﨑佳代子	母性看護学	
川口　千鶴	小児看護学	奨学生選考
塚越フミエ	成人看護学	学年担任
神山　幸枝	老年看護学	寮務主事

表2　学生委員会の議題

回数	年　月　日	議　　題
第1回	H15.5.16	①学生委員会の役割分担について ②入寮許可について
第2回	H14.6.13	①自治医科大学看護学部奨学生の選考について ②学生の健康管理について ③学生相談の機能について
第3回	H14.7.11	①二十歳の会について ②学生の健康管理について
第4回	H.14.9.12	①学生の健康管理について ②門限違反について
第5回	H.14.10.10	①1年生の後学期ガイダンスについて ②アルコールパッチテスト，感染症（特に性感染症）について ③定期健康診断について
第6回	H.14.11.14	①学生の健康診断について
第7回	H.14.12.12	①冬季休業中の事故防止等について
第8回	H.15.1.9	①看護学生寮について
第9回	H.15.2.13	①4月オリエンテーションについて ②看護学生寮担当について
第10回	H.15.3.13	①看護学生寮防災訓練について ②学生カウンセリングについて ③4月オリエンテーションについて

されたのは，学生の健康管理と相談機能のあり方であった。健康管理，とくに身体的な健康管理については，大学保健室と保健委員が連絡を密にして有機的な連携を図り，きめ細やかな支援が展開できたが，心の健康に関しては学部内だけでのサポート機能では限界があり，とくにこころの相談システムのあり方の検討が次年度への継続審議事項となった。

また，寮生活への支援は，門限への対応からスタートしたが，次年度（平成15年度）から学部生の入寮者が多くなることから，寮務主事を選出することとなった。選出後，寮自治会の年間行事である防災訓練の計画をサポートした。

また，初年度の学生生活へのサポートの実情から次年度のあり方を検討し，平成15年4月のオリエンテーションに臨むこととした。

FD・評価実施委員会

委員長　野口美和子

所轄事項は学部の教育内容等の改善のための組織的な研修および研究の実施に関することである。

１．教育評価に関する事項

⑴　学部カリキュラムの評価に関すること

⑵　学生の到達度，成績評価，教員の授業評価（学生および第３者による評価）に関すること

⑶　教育方法，教育環境の改善に関すること

２．教員の資質開発に関する事項

⑴　授業技法の改善の具体的検討に関すること

⑵　教員研修会の企画，実施に関すること

⑶　授業技法，評価に関する教員セミナー等の計画に関すること

委員会構成員は学部長，一般基礎，専門基礎，看護学領域4の計6名とした。

第１回（平成14年5月16日）

１）授業研究について（シラバス，教材，授業方法，達成度〔評価〕，自己授業）を報告し合ってdiscussionし，相互理解と教育能力の向上を図る。4年間にわたって専任教員の関わる全教科目について行う。

２）看護学実習の評価方法に関する研究について，看護学部における授業内容評価の方法を確立する。

３）講演会等を開催し，また学外でのFD講座等に参加する。

４）学生による授業評価は教員が保管し委員会には提出しない。ただし，学生による評価の結果概要を自己評価表に記載する。非常勤の先生も含めて全教員について実施することとし，担当した授業等の終了時に実施する。

５）学生教育に関する活動および「教材開発等」の実績報告について報告用紙を検討する。

６）学生の看護職への適性に関する評価については，学生委員会において，各学年，あるいはクラス全体について検討する（これを入試に反映させる方法を今後検討する）。

７）今後，教育体制の検討・評価，卒業生の活動評価について検討する。

第2回（平成14年6月13日）

１）教員の自己評価について

各教員に対する学生の評価表（別紙1）の評価項目に「各教員が指定する項目」を追加する。また，学生氏名（記載は自由）を削除する。

２）学生による授業評価の実施・公表について

学生による授業評価および授業科目担当教員の自己評価のフロー図を検討した。評価結果の掲

載・配布方法については紀要（年報）委員会で検討し，教授会で了承を得る。教員の自己評価の集計ならびに学生教育活動への参加および教材開発等の実績の集計・掲載・配布方法も上記同様取り扱う。

３）平成14年度授業研究会プログラムの検討

看護学実習評価方法に関する研究計画書を検討した。

第3回（平成14年9月5日）

１）前学期の「各授業科目担当教員の自己評価」結果

２）後学期の「各授業科目担当教員の自己評価」および14年度における「学生教育にかかわる活動への参加および教材開発等の実績」結果について

第4回（平成14年10月17日）

１）看護学実習評価については，基礎看護学実習から取り入れる。

２）看護学実習評価に対する学生の評価表，看護実習の指導方法を改善するため，研究資料として活用することから，学生に研究資料として活用することを承諾するか，しないか明記してもらう。看護学実習指導自己評価（実習担当者用）の様式はフロッピー渡しとするが，手書きでも可とする。学生の評価，実習担当者の評価ならびに意見を基に科目責任者が記入する。

第5回（平成14年11月14日）

１）前学期における「各授業担当教員の自己評価」の結果について（表１）

前学期途中から始めたため，回収率が悪かったことから，後学期は非常勤，兼担，授業がオムニバス形式で行っているすべての授業科目の担当教員について提出してもらうよう徹底する。そのために専任教員，非常勤，兼担の先生の最終講義日に「各教員に対する学生の評価」を漏れなく実施し，「各授業担当教員の自己評価票」を必ず提出してもらう。また，非常勤の先生にも評価のまとめをフィードバックする。

２）看護学部授業研究会について

・研究会の発表資料はA4判で5枚以内とする。

・質疑応答の記録は１枚に発表者自身が記録しまとめて提出する。

・各授業科目担当教員の自己評価，授業研究会資料を冊子にし，教員（助手も含む），非常勤，就任予定の教員および研究会に参加した方にも配布する。

・発表はその年度に開講された科目で専任教員が担当した科目とする。

・発表者は研究会で明らかになった「今後改善，努力すべき点」について，どのように試みたか，その成果等について次年度も継続して資料を作成する。

・研究会の報告は「自己点検・評価報告書」に載せる。

第6回（平成15年３月18日）

１）後学期における「各授業担当教員の自己評価」結果について（表2）

２）平成14年度における「学生教育に関わる活動への参加および教材開発等の実績」について

実績は教員個人が関わったものについてすべて

表1　各授業科目担当教員の自己評価「講義・演習・セミナー」（前学期）

43人（%）

評価項目	大変良い	良　い	やや悪い	悪　い	未記入
講義（演習）の到達目標は明確だった	9（21）	24（56）	10（23）		
教材は適切だった	13（30）	18（42）	9（21）	2（ 5）	1
講義（演習）の重要点が明示できた	7（16）	26（60）	9（21）	1（ 2）	
学生が興味を示した	18（42）	17（40）	8（19）		
熱意を持って臨んだ	23（53）	17（40）	2（ 5）		1
総合評価は	6（14）	31（72）	5（12）		1
合　　計	76（29）	133（52）	43（17）	3（1）	3

表2　各授業科目担当教員の自己評価「講義・演習」（後学期）

33人（%）

評価項目	大変良い	良　い	やや悪い	悪　い	未記入
講義（演習）の到達目標は明確だった	6（18）	25（76）	2（ 6）		
教材は適切だった	11（33）	20（61）	2（ 6）		
講義（演習）の重要点が明示できた	10（30）	18（55）	5（15）		
学生が興味を示した	8（24）	22（67）	3（ 9）		
熱意を持って臨んだ	21（64）	12（36）			
総合評価は	6（18）	26（79）	1（ 3）		
合　　計	62（31）	123（62）	13（ 7）		

記入してもらう。これをもとに教員各自が１年間の仕事を振り返り，教員としての活動を点検し，次年度の自己の課題を設定することで自己成長するのを期待する。

３）平成14年度授業研究会の準備状況報告と授業研究会当日のすすめ方を検討した。

紀要年報編集委員会

委員長　渡邉　亮一

紀要年報編集委員会は，平成14年4月25日に開催された看護学部教授会において設置された。委員会は，渡邉を委員長とし，竹田津文俊教授，成田伸教授，小平京子助教授の計4名で構成された。

上記の4名に看護総務課の松本則子主事を加えた5名で第1回の紀要年報編集委員会を平成14年5月29日に，第2回を6月19日に開催した。この2回の委員会では，平成14年度から看護学部紀要を発行することとして，紀要の名称（英文名称を含む）を「自治医科大学看護学部紀要（Jichi Medical School Journal of Nursing）」に決定し，編集方針，投稿規程などを作成した。

その後，作成した投稿規程に基づいて，平成14年11月30日を締め切りとして，看護学部内，附属病院看護部，大宮医療センター看護部に対して投稿原稿の募集を行い，11編の投稿を得た。12月11日に第3回の編集委員会を開催して，1編につき2名の査読者を決め，投稿原稿の査読を行ってもらった。査読の結果，11編のうち2編は辞退となったが，残り9編については，再査読を経て掲載が承認された。なお，紀要第1号の査読作業は，教授，助教授全員に行ってもらった。

その後，掲載が認められた9編の論文の編集作業，校正作業を行い，平成15年3月25日に「自治医科大学看護学部紀要」第1巻を600部発行した。発行した紀要第1巻は，学内の教員に配布するとともに，国立国会図書館をはじめ，全国の看護系大学，看護系短期大学にも送付した。また，現時点では掲載されていないが，紀要を自治医科大学のホームページに掲載するため，印刷業者に依頼してPDFファイルの作成を行った。

発行した第1巻の体裁はA4判2段組で，総ページ数は106ページであった。また，内容は，野口美和子看護学部長の巻頭言にはじまり，総説1編，原著3編，報告5編であった。なお，紀要の発行に先立って第4回の委員会を平成15年2月26日に開催し，第1号の投稿にあたって投稿規程のなかの不備であった点を見直し，紀要第1巻に改定した投稿規程を掲載した。

年報については，平成14年度には発行する必要がないため，平成15年度以降の課題とした。

予算委員会

委員長　野口美和子

所管事項は学部の教育・研究にかかる予算に関することで，教授会構成員は4名（学部長，常置委員会委員長）である。

第1回（平成14年7月18日）

⑴平成14年度「実習計画策定調査費」について

平成14年度「実習計画策定調査費」の看護領域の予算執行計画を承認した。

⑵海外出張について

申請のあった3件について「自治医科大学教員の海外出張に関する取扱規定」に基づき審議し，「学会発表」を目的とした１件を承認した。

⑶平成15年度の予算について

１）看護総務課関係予算として

①消耗品・個人配当研究費・研究旅費は人頭数に合わせて原稿どおりに要求する。

②看護学領域共同研究費は14年度と同額（350万円）要求。今年度の研究の成果や大学院の立ち上げの状況を踏まえて次年度以降再検討する。

③海外研究費は14年度と同額（一人当たり10万円10件分）要求とする。

④負担金は実績を踏まえて要求する。

２）学生教育に係る予算として

①消耗品は学年進行に従って要求していく。

②実習計画策定調査旅費は14年度と同額の21万円を要求する。

第2回（平成14年9月19日）

⑴平成15年度予算見積もりの「基本的事項」について

予算編成日程および経常的経費の5％マイナスシーリングの方針等について説明した。

⑵平成15年度の「講義実習等に係る予算」につい

て

講義実習事業のうち消耗（備）品費，機器備品費にかかる各領域からの要望額について本学を取り巻く財政状況，学部移行に伴う機器備品の整備拡充，看護技術教育の向上，視聴覚教材の充実等を踏まえて，平成14年度配当額の2倍の上限額で予算要求する。

要望額の削減については，

①各領域間での有効活用（共用）

②学生実習のローテーションによる機器・備品等の数量の削減

③学年進行等を考慮に入れた購入年度の先送り等により見直しを依頼し，各領域の削減見積もりを取りまとめる。

図書館運営委員会

委員　永井優子

2002年度より，看護学部図書館運営委員として，竹田俊明教授と永井の2名が選出され，教務委員会の関連委員会として位置づけられた。委員会開催に先立ち，真弓　忠図書館長から，本委員会の概略について1時間程度の説明を受けた。

2002年度の本委員会は4回（5月16日，7月23日，10月9日，10月22日）開催され，2002年度図書費予算の執行計画，2001年度の利用動態に基づいた時間外開館，2003年度外国雑誌の購入，第2書架等について検討した。外国雑誌は値上がりや為替差損等によって予算額を超過することがあること，および出版社の統合の影響等で雑誌の中止による電子ジャーナルの利用が制限されること等の本委員会の課題は，今後も継続して検討することになる。看護学部の図書費予算は完成年度に向けて漸増する予定であるものの，これらの検討課題は看護学部としても長期的に検討すべき課題である。

自治医科大学看護短期大学の教員は本委員会に所属しておらず，必要とする雑誌や書籍，および教員の多くは重複することから，図書館職員の協力を得て，教務委員会で検討した結果，看護短期大学（専攻科を含む）も含めて，図書費を有効に活用することができるように一括して使用できるようになった。また，文献検索サービス年間利用料金についても一括して負担することとなった。

また，看護学部の教育および看護学の実践・研究に不可欠な図書および雑誌を整備するために，Brandon／Hill Selected List of Print Nursing Books and Journal等の資料も活用し，教員の専門領域ごとに検討して学部としての整備の優先順位を決定する作業を進めた。購入方法について教務委員会で検討した結果，夏に1回雑誌（洋雑誌･和雑誌）について各領域から優先順位等も含めてアンケートを行い，購入雑誌全てをリストアップして看護学学部全体で必要するものを最優先に，できるだけ領域の偏りがないように検討した。図書についても同様に夏および春の2回購入希望アンケートを実施し，図書館運営委員が取りまとめ，図書館職員の協力を得て予算を考慮して購入することとなった。

2002年4月の看護学部開設の準備として，2001年度に5,300冊を受け入れていた。その内訳は，約3,300冊が看護学の専門書であり，心理学，教育学，女性学，医療関係のエッセイなどを中心とした教養領域の図書が約2,000冊である。2002年度現在，看護学部関連予算で購入している洋雑誌は48誌，和雑誌は69誌で，予約雑誌の看護学部関係の図書購入費に占める割合は約50％であった。

看護学専門書の配架についても検討をした。現状では大きなひとつのカテゴリーとして配架され，教育，実践および研究で活用しにくくなっている。1997年に保健師・助産師・看護師養成所指定規則が改正され，看護学関連の教科書の内容等に大きな変化があるにもかかわらず，古い教科書が大量に配架されていることもある。現在は蔵書数が少ないので検索上支障になることは少ないが，今後は看護学の専門領域に配慮した図書の配架を検討する必要がある。授業案内（シラバス）に掲載されている教科書および参考書は，指定図書コーナーとして特設されていたが，2002年10月からカリキュラムの構成で示されている4つのPhase（人間の本質の理解，健康を支える生活と社会のしくみ，看護実践の理解，看護の総合的理解）に内包されているカテゴリー別に配架することになった。なお，看護実践の理解のPhaseには下位カテゴリーが明示されていないので，基礎看護学，地域看護学，精神看護学，母性看護学，小児看護学，成人看護学，老年看護学の7つの専門領域名を用いることになった。指定図書コーナーに配架されると，館内閲覧のみになることも踏まえて，看護学部では指定図書コーナーを利用しない方針を立てた。

さらに，学生の図書館利用を勧めるために，新入生に対するオリエンテーションと文献検索ガイダンスについても，図書館職員の協力で新たな方法を検討した。2003年度は，新入生オリエンテーションは50人ずつ2回に分けて，出席を義務づけ，文献検索ガイダンスは2年次学生の希望者を対象とし，１回20名を限度として5回実施する方針として，具体的方法についてさらに検討を行った。

臨床指導者研修会

臨床指導者研修会担当　成田　伸

自治医科大学では，看護学部の前身である看護専修学校，看護短期大学の時代から，教育側と臨床側との間に緊密な臨床指導体制を作り上げてきた。その中心にあったのは，教員と附属病院看護部教育担当者によって構成される臨床指導者連絡会であり，そこが中心となって臨床実習の運営の調整や臨床指導者の研修・教育を行ってきた。平成14年度は短大がまだ2学年在籍していたたこともあり，短大の教育も兼務する看護学部教員が参加し，従来の連絡会運営および臨床指導者研修会を開催した。臨床指導者研修会は，臨床経験3年目以上で当該年度に臨床指導者として臨床指導を行っている看護職員を対象に行われ，その科目は「実習指導の原理」,「実習指導の実際」,「実習指導の評価」,「臨床実習指導の演習」,「人間関係論セミナー」,「看護論」,「看護過程」であり，一部の受講者に対して「教育学」の履修が求められていた。研修会の開催は原則月1回であり，臨床で勤務の合間の受講という状況を考慮し各科目を複数回開催し，2年間ですべての科目の履修を修了するというプログラムであった。

平成14年度には，対象となる臨床指導者が68名であり，オリエンテーションを含め計7回臨床指導者研修会が開催され，毎回の受講者は38名～65名であった。

上記連絡会および研修会を継続する一方で，看護学部の臨床実習の開始に向けていくつかの課題が明らかとなった。平成14年度までに行われた臨床指導者研修会のプログラムは，旧厚生省の臨床指導者教育プログラムを参照して作成されたものであり，「実習指導の原理」,「実習指導の実際」,「実習指導の評価」という科目名からわかるように，臨床指導者が実地の指導はもちろんのこと実習評価まで担うという，従来看護専修学校や短期大学で行われてきた臨床実習のスタイルを踏襲したものである。そこでまず，看護学部の臨地実習における臨床指導者の役割の明確化を試みた。学内での検討を重ね，以下のように明文化して提示した。

> 臨床指導者は，学部教員と共に臨床実習における学生の教育・指導を担当し，教員を補佐する。臨床指導者は，学生が実習で受け持つ対象者に行われるケアの責任を持ち，学生が立案する看護計画の具体策に対する助言や実施上の修正等についてアドバイスしたり，学生が対象者に対して直接行うケアを，スタッフ・教員と協力しながら直接指導したりする役割を果たす。また，臨床と大学間の調整を行う。
>
> 臨床指導者は，スタッフ・教員との調整を確実に実施して，対象者へのケアが安全に確実に実施される体制を作り上げる責任を持つ。

後学期に初めて実施された基礎看護学実習Ｉでは，臨床指導者に対して上記の臨床指導者の役割を提示し，臨床指導者と教員とが協力して学生の教育・指導を行った。

従来の臨床指導者の育成においては，研修会を受講しながら臨床指導者を担当するというスタイルがとられていた。しかし，これでは看護学部が求めるものを十分理解しない状態で臨床実習の指導にあたることとなる。そこで，臨床指導者の選定に当たっても，臨床経験2年半以降に研修会を受講し，研修会修了者で臨床経験3年目以上の者を臨床指導者とするというように変更することにした。そのためには，指導者研修会の開催を後学期に集中した開催のスタイルに変更する必要が生じた。また，「人間関係論セミナー」,「看護論」,「看護過程」,「教育学」は内容が臨床実習の指導に十分特化されておらず，位置づけがあいまいであると思われた。このような状況を考慮し，平成15年度からは新規の臨床指導者プログラムを開始することを前提に検討を重ねた。その結果は以下のようになった。

臨床指導者の育成は，従来と同様に看護学部と附属病院看護部が共同で行い，その協力のもと臨床指導者研修会を開催する。研修会の科目すべての履修が修了した受講生には，看護学部長名で修了証を授与することとなった。

新しい臨床指導者研修会カリキュラムは，以下に示した科目を１日４時限5日間で開催することを予定し，原則的には後学期毎週土曜日に連続５回開催とする。臨床で働きながら受講する看護職にとってはかなり大変な要求であるが，集中した研修会の開催は受講者の研修内容の理解を高めると期待された。また同時に，受講生の研修会への参加に積極的・主体的な姿勢を求めることも目的のひとつとした。科目の内容は，看護の大学教育，大学教育における臨地実習の位置づけ，本学部が臨地実習に求めているものを基本に，臨床指導を行う上で基本的な知識や指導技術を習得してもらえることを前提に精選した。

・看護学部カリキュラムの概要・理念の理解（1時限）
・看護教育学（4時限）
・臨床実習指導論（3時限）
・看護過程（4時限）
・看護事例検討（4時限）
・臨床実習における人間関係論（4時限）

この新カリキュラムは平成15年度から開始する予定であるが，しばらくは旧のプログラム受講者から新のプログラム受講者への移行期にあるので，スムーズな移行に向けて課題の検討をさらに重ねている。

教育研究分野別報告

学　部　長

教授　野口美和子

⑴　スタッフの紹介

教授　**野口美和子**（2002年4月1日就任）

学歴：1960年3月東京大学医学部衛生看護学科卒業，1988年12月保健学博士学位取得（東京大学）。職歴：1960年4月から国立名古屋病院に看護婦として勤務，横浜市立大学医学部付属高等看護学校教員，神奈川県立衛生短期大学講師（成人看護学，看護学実習）として勤務後，1979年4月に千葉大学看護学部助教授（成人看護学第一講座）に就任，1991年4月に千葉大学看護学部教授（成人・老人看護学講座）に就任，1997年4月から2001年3月まで千葉大学看護学部長を併任。

⑵　教育の概要

１）離島とへき地医療の視察

沖縄県，島根県，群馬県等の離島等へき地の医療の現地視察・見学をした。

２）成人看護学教科書（メヂカルフレンド社）の編集

成人の看護について機能障害別に編集した。

３）看護系大学院等での授業

山梨医科大学大学院，沖縄県立看護大学，島根医科大学において老人看護学に関する講義を行った。

４）老人病院看護学の編集

青梅慶友病院における看護の実際について看護介護開発室のスタッフと検討した。

５）他看護大学の運営協議会等参加

石川県立看護大学，岐阜県立看護大学に出向いて意見を述べた。

６）日本看護系大学協議会の委員会活動

FD委員会，専門看護師教育課程認定委員会に所属して活動した。

７）大学基準協会での活動

看護学教育研究委員会に所属し，看護学研究科分化教育基準の修正を行った。

８）講演等

栃木県看護協会地域医療セミナー等で講演した。

⑶　研究の概要

１）「介護保健施設における痴呆症をもつ入所者に関するリスクマネジメントの導入と理論化」に関する研究

科学研究補助金による「介護老人保健施設における痴呆症をもつ入所者に関するリスクマネジメントの導入と理論化」の研究代表者として研究を推進した。

２）特別講演等

日本高齢者腎不全研究会設立記念講演，International Symposium on Health Care Reform and Nursing Graduate Educationのシンポジストとして「大学院自己点検と外部評価」の講演を行った。

⑷　その他

１）学会活動

日本老年看護学会（理事，編集委員会），日本糖尿病教育看護学会（理事，日本糖尿病療養指導士認定機構理事），日本老年医学会（倫理委員会）で活動した。

２）日本看護協会の委員会活動

専門看護師制度委員として活動した。

３）その他委員会活動

医道審議会保健師助産師看護師分科会委員，長寿科学総合研究事業事前評価委員，文部科学省看護学・保健学視学委員として活動した。

一般基礎

教授　髙村寿子

⑴　スタッフの紹介

教授　**髙村寿子**（2002年4月1日就任）

学歴：1967年宇都宮大学教育学部卒業（教育学士），1968年国立公衆衛生院専攻課程衛生教育科修了，1982年順天堂大学大学院健康管理学修了（体育学修士），1996年昭和大学医学部産婦人科学研究生修了（医学博士），1996年～1997年スタンフォード大学医学部疾病予防研究センター留学。職歴：1968年埼玉県加須保健所，1970年埼玉県立厚生専門学院，1974年埼玉県立衛生短期大学，1987年自治医科大学看護短期大学。社会活動：日本思春期学会，日本健康教育学会，日本更年期学会，日本女性心身医学会，日本公衆衛生学会など。

教授　**渡邉亮一**（2002年4月1日就任）

1952年3月8日生。神奈川県出身。学歴：1976年東京大学医学部保健学科卒業，1979年東京大学大学院医学系研究科保健学修士課程修了（保健学修

士），1982年東京大学医学部医学系研究科保健学博士課程満期退学。職歴：1982年日本大学医学部助手（～1984年），1984年東京大学医学部附属病院助手（～1989年），1989年自治医科大学総合医学第2講師（～1995年），1995年自治医科大学看護短期大学助教授（～1998年），1998年同教授（～2002年）。所属学会：日本医療情報学会，日本病院管理学会，日本医療福祉設備学会，日本診療録管理学会，日本公衆衛生学会など。

講師　**余語琢磨**（2002年4月1日就任）

1963年生。東京都出身。学歴：1989年早稲田大学第一文学部卒業，1991年早稲田大学大学院文学研究科修士課程修了（文学修士），1996年早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学。職歴：1996年早稲田大学人間科学部助手，1999年自治医科大学看護短期大学専任講師。その他，早稲田大学，和光大学で非常勤講師。所属学会：日本民族学会，日本生活学会，日本考古学協会，日本保健医療社会学会，早稲田大学文化人類学会など。

⑵　教育の概要

１）歴史と人間

余語は，1学年前学期の選択科目として，地域に暮らす人々の生活・意識の特性と変容を歴史的視点から理解することを目的に，30時間の講義を行った。主たるテーマは，進化からみる人類の特徴，環境と食の地域史，病いと健康の地域史，祈りと心性の地域史である。この講義の特色は，VTR等の視覚教材の多用や，近隣の有機栽培農家・史跡等への校外学習による体験から，歴史的事象へのリアリティと関心の深まりをねらう点にある。さまざまな時間・地域に生きた他者の経験や生活の有り様を学びながら，その背景となる社会や環境との関係や変化を見通すための問題意識を得た学生が多かった一方で，テーマへの関心が低い一部の学生については次年度へ授業方法上の課題を残した。受講者は56名であった。

２）生活と社会

余語は，1学年前学期の必修科目として，個人と社会の結びつきを生活者の視点から考察する講義のうち開講時の2時間を担当した。内容は，人文・社会科学における人間像の現状を概説し，関連諸科目のオリエンテーションを兼ねた。

３）保健医療情報学

渡邉は，1学年の学生を対象に30時間の保健医療情報学の講義ならびに演習を行った。保健医療情報学は選択科目で，受講者は89名であった。

４）現代保健・看護セミナー

髙村・渡邉・余語は，それぞれ里光やよい講師，神山幸枝助教授，西岡和代助教授と組んで，1学年の学生を対象とした選択科目である現代保健・看護セミナーを担当した。現代保健・看護セミナーは，自分や他者の生活や体験の共有から保健・看護につながる問題を見出すことを目的として少人数で行うゼミナール形式の授業である。

５）その他

髙村は，非常勤講師として，埼玉県立大学短期大学部助産学専攻科および国際医療福祉大学で「健康教育学」の講義をいずれも30時間担当した。

渡邉は，非常勤講師として，千葉大学看護学部の「環境保健学」の講義を2時間，女子栄養大学保健栄養学科の「情報科学演習」の講義を28時間，また社団法人南埼玉郡市医師会久喜看護専門学校の「看護研究」の講義，演習を30時間担当した。

余語は，早稲田大学教育学部の非常勤講師として「人類学」の講義を，高知医科大学医学部の招聘講師として「発展途上国における地域文化特性と医療」をテーマに2時間の講義を行った。後者では，インドネシアにおける現代医療と民俗医療の多元的状況と，住民の受療行動の実際を概観し，その社会的・文化的背景への問題意識と，健康開発・世界医療システムにおける困難要因に対する理解の涵養を図った。

⑶　研究の概要

１）ピアカウンセリング・ピアエデュケーションのマニュアル作成とその効果的普及に関する研究

髙村は，平成14年度から2年間にわたる厚生労働科学研究（子ども家庭総合研究事業）「ピアカウンセリング・ピアエデュケーションのマニュアル作成とその効果的普及に関する研究」班の主任研究官として初年度の研究を行った。

２）セルフエフィカシィ介入による主体的行動に関する研究

髙村は，日本家族教育計画協会の研究補助を受けて，「セルフエフィカシィ介入による主体的行動変容を支える新健康教育プログラム開発研究」の主任研究員として研究を行った。

３）PMS（月経前症候群）に関する研究

髙村は，前年に引き続き，月経連絡協議会のPMS（月経前症候群）に関する研究，特に健康教育の立場からPMS健康教育の方法についての研究を行った。

４）急性期病院における入院症例標準化データセットの開発に関する研究

渡邉は，日本病院管理学会から研究費の助成を受けて（研究代表者　梅里良正助教授（日本大学医学部医療管理学教室）），他施設の10名の研究者らと「急性期病院における入院症例標準化データセットの開発に関する研究」を行った。

５）病いの語りに関する研究

余語は，慢性疾患を病む人々のインターネット上における「病いの語り」を対象として，その苦悩と日常的実践への分析的視座を得ることを目的に研究を行った。具体的にはアトピー性皮膚炎の病者を対象に，医療人類学的方法を用いて，ネット上の語りを扱う有効性と限界，病者が周囲の視線から背負わされるスティグマ，困難を乗り越えようとする「戦術」などを明らかにした。その成果は，2003年刊行の自治医科大学看護学部紀要第１巻に原著として掲載された。

６）身体観に関する研究

余語は，身体観に関する基礎的研究の一環として，現代日本における身体装飾・加工の実際と身体への意識をとりあげ，人類学・社会学的方法論と発達心理学的視角の融合を図った。具体的には，身体技法・時間・身体の＜移行＞・共同性・まなざし等をキーワードとして，メーク・美容整形・ダイエット・トランスジェンダーなどに関する語りを分析し，身体への意識を「4象限」で捉える理念型を提示するものであった。その成果は，2003年刊行の共著に収録された。

７）東南アジアにおける医療人類学的研究

余語は，2001年に引き続きインドネシア共和国バリ島東部の農村をフィールドとして，現代医療の普及と民俗医療の実態に関する調査を2002年8～9月に実施した。具体的には，民俗医療者（呪医等）が行う，個人または地域共同体内の諸問題に起因する「病気」へのアプローチ方法，呪術的「病者」を抱えた家族をめぐる騒動と，その「語り」の時系列変化の追跡調査などに関する定性的資料の収集と考察を行った。

８）介護・受療行動の地域性に関する研究

余語は，栃木県東部をフィールドに，住民の保健・福祉・医療に関する行動に地域文化や社会資源が与える影響を探る調査を，心理学（川野健治，国立精神・神経センター精神保健研究所）との共同研究として継続中である。その目的は，人類学的なコミュニティ研究法と，心理学的な研究法を統合しながら，介護者の意志決定・行動における地域特性や情報フロー等のあり方を明らかにすることにある。成果の一部は，日本発達心理学会第13回大会において発表した。

９）地域社会の変容と未来像に関する研究

余語は，栃木県東部の旧城下町における大規模な祭り集団を対象として，地域社会の紐帯の要となっている若衆グループ内における世代間の葛藤とその社会的背景について調査し，LPP論を援用しながら分析を行った。成果の一部は，日本生活学会第29回秋季研究発表大会において発表した。

⑷　その他

１）第三者病院機能評価事業活動

渡邉は，平成13年度に引き続いて，財団法人日本医療機能評価機構の一般病院B部会員ならびに評価調査者として，第三者病院機能評価事業に関与した。

２）さいたま緑の森博物館における活動

余語は，埼玉県入間市に所在する自然環境の展示・教育活動を目的とする博物館において，県内の児童およびその親約100名を対象とした稲作体験教室への支援活動を行った。おもに古代米（赤米）に関して栽培を指導し，人と自然の関わりに対する体験的理解の涵養を図った。

３）とちぎ生涯学習文化財団における活動

余語は，栃木県の埋蔵文化財センターにおける事業の講師として，下陰遺跡の発掘現地指導・遺物指導を行った。

４）学会活動

髙村は，日本思春期学会理事，同学会編集・研修委員，日本健康教育学会評議員，日本更年期学会評議員，日本女性心身医学会理事，全国性教育研究団体連絡協議会理事，とちぎ思春期研究会会長などを務めた。

渡邉は，日本医療福祉設備学会理事ならびに事業委員会委員，日本医療情報学会評議員ならびに編集委員会委員，日本診療録管理学会評議員ならびに編集委員会副委員長，日本病院管理学会評議

員，東京都医師会医療情報検討委員会委員などを務めた。

余語は，日本生活学会評議員，早稲田大学文化人類学会編集委員などを務めた。

専門基礎

教授　竹田俊明

⑴　スタッフの紹介

教授　**竹田俊明**（2002年4月1日就任）

1947年7月13日生。北海道出身。学歴：1970年北海道大学理学部生物学科卒業，1972年同大大学院修士課程修了，1979年東京大学大学院より医学博士の学位授与。職歴：1972年東京大学医学部助手（第一生理学講座），1974年自治医科大学第一生理学講座助手，1981年より同講師。この間，1979年8月から1980年8月まで米国NIH，NINCDSの研究員として留学。1987年自治医科大学看護短期大学助教授，1995年同教授。所属学会：日本生理学会，日本神経科学学会，日本神経回路学会，日本東洋医学会，形の科学会。

教授　**竹田津文俊**（2002年4月1日就任）

1953年5月29日生。大分県出身。学歴：1978年自治医科大学医学部卒業，1978年医師免許取得，1992年東京大学大学院医学系研究科博士課程修了（博士（医学）），1991年8月より1992年8月まで（スウェーデン）ウプサラ大学ルードビッグ癌研究所留学。職歴：1978年大分県庁環境保健部・大分県立病院，1980年大分県立療養所三重病院，1982年自治医科大学血液学講座，1983年大分県清川村国保直営診療所，1985年大分県立三重病院，1992年東京大学医学部第三内科，1992年自治医科大学附属大宮医療センター総合医学第１講座血液科，1999年自治医科大学看護短期大学。

⑵　教育の概要

専門基礎分野は，看護の対象である人間の理解と看護実践の基礎となり看護学学習の基盤となる科目から構成されている。

１）竹田は，1学年に対して人体の構造と機能Ⅰ，人体の構造と機能Ⅱの授業を担当した。これらは本学カリキュラムで人間の本質の理解＜身体システム＞に位置づけられ，看護婦教育指定規則の中での「人体の構造と機能」に関する内容を教授している。科目の目標は，人体の構造，解剖学的構成を学習して身体機能を理解することであり，人体全般に関する基礎的な概念を修得することである。ここでの学びを元に「疾病の成り立ちと回復の促進」の理解，看護専門の学習，理解，応用へと発展させていくことになる。

人体の構造と機能Ⅰは90時間（前期）で，循環，呼吸，血液，消化，腎・尿排泄，体液浸透圧と体液pHの調節，内分泌，生殖の各植物性機能，ホメオスタシスをカバーし，人体の構造と機能Ⅱでは45時間（後期）で神経，感覚，筋骨格・運動系をカバーした。個別の機能概念を積み上げていくばかりでなく，統合的理解，応用ができることを目指した。解剖学オリエンテッドな内容について，オムニバス形式により自治医科大学医学部解剖学講座の大河原重雄教授，竹内公一助手が計24時間（人体の構造と機能Ⅰ）および10時間（人体の構造と機能Ⅱ）教授した。

講義形式を主体としたが，一部実習，演習を取り入れた。血液，呼吸，体液，神経・筋の興奮性に関して実験を含む体験学習を，また人体解剖実習として見学による学習を実施した。

２）竹田津は，疾病と病態Ⅰを担当した。疾病と病態Ⅰの目標は「看護に必要な疾病の発症機序とその治療法の理解」である。実地臨床に即した内容を核とし，看護場面において遭遇する種々の患者の病態理解を第一の目的として講義を行った。

2002年度後期，2002年度入学の1年生に対し，まず症状・症候論を中心に，身体観察，検査，診断にいたる過程を総論的に理解する臨床医療総論ともいうべき講義を実施した。次に，疾病と病態の各論にあたる部分では，血液系，循環器系，内分泌系，免疫系，代謝系，消化器系，呼吸器系，腎泌尿器系，脳神経系および電解質の異常の病態生理と治療を中心に講義を行った。

講義時間の総計は，各系2～4時間ずつで合計68時間となった。

３）1学年に対する現代保健・看護セミナー（30時間）では，それぞれ8名の学生を担当し指導した。学生の自主性，自発性を重んじるなかで，学生自身の保健・看護問題への気づき，調査，学習，討議，体験など様々な活動をスムーズに進められるよう助言，支援した。

４）専門基礎諸科目

この分野の科目および関連の深い科目として，

物理学，化学，生物学，生化学，薬理学，疾病と病理が開講された（いずれも１学年科目，前期・後期の別は省略）。これらの科目については，医学部からの兼担，附属病院スタッフ，学外非常勤講師の方々が科目責任教員としての役割を果たされた。

５）自治医科大学看護短期大学看護学科では，2学年の地域実習30時間，3学年の看護研究Ⅱ60時間を担当した。同専攻科助産学専攻では，竹田が生殖の構造と機能Ⅰを8時間担当した。

６）竹田は，茨城県結城看護専門学校において非常勤講師として解剖生理学の講義を45時間担当した。

⑶　研究の概要

１）竹田は，ニューラルネットワークの機能と応用についての研究を行い，宇都宮大学工学部電気電子工学科松岡研究室との共同研究で「ニューラルネットワークを用いた漢方薬処方支援システムの開発」を行った。

２）竹田津は，「医療事故におけるインシデントやミスの意義」と「末期疾患患者における延命措置の意思決定」の研究を開始している。現在両研究とも緒についたばかりである。

⑷　その他

１）竹田は，日本生理学会の評議員及び茨城県看護教育財団結城看護専門学校の評議員を務めている。

基礎看護学

助教授　野中　静

⑴　スタッフの紹介

教授　**田口ヨウ子**（2002年4月1日就任，2003年3月31日退職）

学歴：1953年日本赤十字社山口赤十字病院看護婦養成所卒業，1970年東洋大学文学部国文学科卒業，1998年吉備国際大学大学院社会学研究科社会学専攻修士課程修了（修士（社会学）），1999年吉備国際大学大学院保健科学部修士課程教授認定。職歴：1975年千葉大学看護学部講師，1982年同助教授（1985年まで），1987年自治医科大学看護短期大学教授（1993年まで），1993年広島国際大学保健医療学部教授（2000年まで），2001年自治医科大学看護短期大学教授。所属学会：日本看護科学学会ほか。

助教授　**野中　静**（2002年4月1日就任）

学歴：1975年新潟大学医学部附属看護学校卒業，1984年（米国）ユニオン大学国際学部人間関係学科卒業，1999年女子栄養大学大学院栄養学研究科保健学専攻修士課程修了（修士（保健学）），1999年国立健康･栄養研究所客員研究員（2001年まで）。職歴：1993年慶應義塾看護短期大学講師，2000年同助教授，慶應義塾大学医学部兼担助教授（2001年まで），2001年聖母女子短期大学助教授（2002年まで）。所属学会：日本看護科学学会，日本栄養システム学会，日本静脈経腸栄養学会ほか。

講師　**大久保祐子**（2002年4月1日就任）

学歴：1986年千葉大学看護学部卒業（看護学士）。職歴：1986年筑波大学附属病院（1988年まで），1988年自治医科大学附属病院（1991年まで），1991年自治医科大学看護短期大学助手，1995年同講師。所属学会：日本看護科学学会，日本看護研究学会，日本看護技術学会，日本人間工学学会，日本褥瘡学会，日本看護学教育学会ほか。

講師　**里光やよい**（2002年4月1日就任）

学歴：1982年東海大学文学部日本文学科卒業（文学士，教員免許状（国語）），1986年東京都立新宿看護専門学校卒業。職歴：1986年東京都立豊島病院（1989年まで），1989年埼玉医科大学短期大学助手，1995年同講師（2002年まで）。所属学会：日本看護学教育学会，日本看護科学学会，日本教育学会，日本看護診断学会，日本医学教育学会ほか。

助手　**亀田真美**（2002年4月1日就任）

学歴：1996年東京医科歯科大学医学部保健衛生学科看護学専攻卒業（学士（看護学））。職歴：1996年大阪大学医学部附属病院特殊診断治療部（2002年まで）。所属学会：日本看護研究学会，日本看護学教育学会，日本医学教育学会。

助手　**菅野こずえ**（2002年4月1日就任）

学歴：1995年自治医科大学看護短期大学看護学科卒業。職歴：1995年東京女子医科大学病院（2001年まで），2001年自治医科大学看護短期大学助手。所属学会：日本看護学教育学会，日本医学教育学会。

助手　**豊田省子**（2002年4月1日就任）

学歴：1977年獨協医科大学附属高等看護学院卒

業，1996年日本女子大学家政学部食物学科卒業，2001年国際医療福祉大学大学院医療福祉学研究科看護教育･管理分野修士課程修了（修士（保健医療学）。職歴：1977年獨協医科大学病院，同附属看護専門学校専任教員（1996年まで），1997年栃木県看護協会（1998年まで），1999年栃木県市役所（2001年まで），2001年自治医科大学看護短期大学助手。所属学会：日本看護学教育学会，日本カウンセリング学会，日本ヒューマンケア心理学会ほか。

⑵　教育の概要

１）看護学原論

看護学原論は，1年次前学期，3単位45時間の必修科目である。学習目的は，看護を理解するための共通基盤である看護の概念・目的について，歴史的背景を踏まえて理解し，看護実践の基盤となる人間観・生活感・健康観を養うとともに，看護をとりまく諸事情に関する現実的課題を見据えて将来を展望する能力を養うことである。田口が45時間の講義を担当した。

２）基礎看護学Ⅰ

基礎看護学Ⅰは，1年次前学期，2単位60時間の必修科目である。学習目的は，看護実践の理論的根拠と問題解決過程を理解し，あらゆる看護実践の共通基盤となる看護技術を学習することである。野中が32時間講義，里光が12時間講義，大久保が4時間講義を，また12時間の演習は基礎看護学領域全教員で担当した。

３）基礎看護学Ⅱ

基礎看護学Ⅱは，1年次後学期，2単位60時間の必修科目である。学習目的は，日常の生活行動に関連する援助としての看護実践に必要な理論と基本的看護技術について学習することである。環境，ボディメカニクス，清潔，食，排泄などについて，24時間の講義と36時間の演習を行った。講義は，大久保が12時間，里光が4時間，野中が8時間担当した。演習は基礎看護学領域全教員で担当し，学生の主体性を促しつつきめ細かい指導に努めた。

４）基礎看護学実習Ⅰ

基礎看護学実習Ⅰは，1学年10月21日から26日の1週間，1単位の実習を行った。実習の目的は，「対象によい医療を提供するために，看護におけるコミュニケーションの機能を学ぶ」である。自治医科大学附属病院の成人系15病棟・教員17人で実施した。学生は入院生活に関係する各部門の見学後，病棟において看護師のとる多様なコミュニケーションの場面に参加し学習した。また，受け持ち患者とのコミュニケーションを通して，看護者としてのコミュニケーションの難しさを体験しながらも，受け持ち患者の入院生活の状態，不自由さや辛さを理解することができた。

５）看護学概論

看護学概論は，1年次前学期，1単位15時間の必修科目である。学習目的は，人々の健康における看護の働きに関しての概要を理解し，看護学を学ぶための基盤を養うことである。科目責任者を野中が，基礎看護学領域4時間の講義を三重県立看護大学松田たみ子教授が，精神看護学領域2時間の講義を永井教授が，地域看護学領域2時間の講義を篠澤教授が，母性看護学領域2時間の講義を川﨑教授が，小児看護学領域2時間の講義を川口教授が，成人看護学領域2時間の講義を塚越教授が，老年看護学領域2時間の講義を山梨県立看護大学水戸美津子教授が担当した。

６）現代保健・看護セミナー

現代保健・看護セミナーは，15時間の選択科目である。学習目的は，身近な生活や体験の中から保健および看護につながる問題を見いだす方法を学習することである。田口は曽我部講師（母性看護学）と7人の学生を担当した。野中は塚越教授（成人看護学）と8人の学生を担当した。大久保は川﨑教授（母性看護学）と9人の学生を担当した。里光は高村教授（一般基礎）と8人の学生を担当した。学生個々の興味分野についての発表と質疑や食・排泄など身近な生活体験から感じたことをテーマとし，探求を深めた。担当教員は，討議が実りあるものになるようサポートを心がけた。

⑶　研究の概要

１）基礎看護学実習の評価方法に関する研究

「基礎看護学実習の評価方法に関する研究」を栃木県看護協会から研究助成金を受けて行っている（研究代表者：菅野こずえ）。

２）知識創造と看護実践できる学生を育てるためのSECIモデルに基づく基礎看護学技術演習効果の研究

「知識創造と看護実践できる学生を育てるためのSECIモデルに基づく基礎看護学技術演習効果の研究」を開始した。基礎看護学演習システムの構

築検討を行い，自治医科大学看護学部第１期生1年次の『基礎看護学演習スタディガイド』作成および基礎看護学演習室のAV機器配備を実施した（研究代表者：野中　静）。

３）看護技術における模擬患者を導入した客観的臨床能力試験についての研究

「首都圏看護系大学SP･OSCE研究会（仮称）」を発足させた。SP（模擬患者）の看護基礎教育への導入，看護技術の客観的臨床能力試験の実施と評価について研究することを目的として，医学書院「看護教育」編集室の協力を得て5大学23名の会員による研究会を定例化した（代表世話人：野中　静）。

地域看護学

教授　篠澤俔子

⑴　スタッフの紹介

教授　**篠澤俔子**（2002年4月1日就任）

学歴：1968年看護師免許取得，1969年保健師免許取得，1975年国立公衆衛生院専攻課程卒業，1992年厚生省看護研修研究センター幹部看護教員養成課程卒業，1999年放送大学教養学部卒業。職歴：1969年栃木県庁に就職（宇都宮保健所保健師，衛生環境部保健予防課主査，佐野保健所健康指導課長，衛生福祉大学校保健学科教授，保健福祉部児童家庭課・保健福祉課課長補佐，衛生福祉大学校主任教授など）（2002年まで）。

助手　**鈴木久美子**（2002年4月1日就任）

学歴：1990年千葉大学看護学部卒業，1997年千葉大学大学院看護学研究科博士前期課程修了。職歴：1989年聖マリアンナ医科大学横浜市西部病院に看護師として勤務（～1990年），1990年栃木県宇都宮市役所に保健師として勤務（～1995年），2001年自治医科大学看護短期大学勤務。

助手　**島田由美子**（2002年4月1日就任，2003年3月31日退職）

学歴：1995年自治医科大学看護短期大学卒業，1996年群馬県立福祉大学校保健学科卒業，2001年放送大学教養学部卒業。職歴：1996年国家公務員共済組合連合会虎ノ門病院（2001年まで），2001年自治医科大学看護短期大学助手。

⑵　教育の概要

１）地域の生活と健康は，1単位30時間で1年生を対象にした選択科目授業である。67名の学生が受講した。地域の人々の生活を理解し健康との関連性について学ぶことを目的とした授業科目である。生活について，身近にとらえることができるように自己の生活活動の振り返りやグループワークを通して，環境の違いにより生活行動が異なることや自己と他者との生活の営みの違いなどを考えさせた。また，地域の人々の生活に自然や社会や文化などの環境がどのように影響しているか，都市や農村，離島など様々な地域生活と健康との関係，慣習や生活習慣が健康に及ぼす影響はどのようなものか，ライフステージ別にみた生活や健康はどのような特徴があるのか，人々はどのように考え健康行動をとるのかなどを事例，写真，資料，ビデオを用いて教授した。

２）現代保健・看護セミナーは，1単位30時間で1年生を対象にした選択科目である。6名の学生が受講した。ボランティアについて話しあうなかで「自分達の街は住みやすいか」に発展し，実際に自分達で自治医科大学周辺地域を車椅子で移動して検証した。次に地域の障害者宅の訪問や駅やスーパーに同行したなかから障害者が住みやすい街であるかを調べた。その結果，車椅子生活者にはやさしい店舗の構造も視力障害者には難しいことや障害者用の自販機の拡大にはコストと活用度合いからも考える必要があることに気付いた。体験やグループワーク，教員，講師からの助言などを通して，それぞれ異なる価値観や生活体験の違いに気付いた。また，すべての障害者にとってどのような街がよいかを考えることができた。

３）看護学概論（健康と生活を守る看護の役割・機能Ⅱ）は，１単位15時間の内の1回90分授業。

地域看護学は，地域で生活する様々な健康レベルにある人々で個別から地域住民全体を対象にし，健康や生活の質向上に寄与する看護の実践科学であることを教授した。また，地域看護の対象や看護活動，ヘルスケアシステムにおける看護の役割などについて，サザエさんの事例やパワーポイント，資料などを用いて授業をすすめた。

⑶　研究の概要

１）篠澤俔子，鈴木久美子，島田由美子による共同研究「へき地診療所看護活動の実態」

へき地における看護活動方法の特質，特にへき地における看護管理の特質を明らかにすることを目的に共同研究として取り組んだ。

その第一段階として，過疎地域自立促進特別措置法，山村振興法，離島振興法，いずれかの指定を受けている8地域において開設されている診療所の看護職に対し，面接調査を行い，へき地診療所における看護活動の現状を明らかにした。へき地診療所における看護活動の内容は診療の介助と日常生活援助が中心であること，患者との密接な関わりを持ち，患者個々のアクセスの不便さに配慮した看護援助，家庭生活を熟知した看護援助などを行っていること。診療所看護職の会議参加や関係機関との連携が十分行われていないことが明らかになった（第6回日本地域看護学会にて発表予定）。今後は豪雪地帯における診療所看護活動を把握する予定である。

２）篠澤俔子

①髙村寿子教授のピアカウンセリングの評価及びその効果的普及に関する研究に参加。

厚生科学研究子ども家庭総合研究推進事業補助金（研究代表者　高村寿子教授）の交付を受けて，「ピアカウンセリング・ピアエデュケーションのマニュアル作成及び効果的普及に関する研究」の分担研究班長自治医科大学公衆衛生学中村好一教授との共同で「ピアカウンセリングの評価及びその効果的普及に関する研究」を行っている。平成14年度から栃木県が県下の高校生を対象に性行為感染症予防や妊娠中絶予防を目的として，ピアカウンセリング研修を実施している。今年度は，効果的普及を図るための予備調査として，受講者などを対象に性に関する基本的特性やピアカウンセリングに対するニーズ調査を行った。

②春山早苗群馬県立医療短期大学専攻科地域看護学専攻助教授の精神障害者を支える市町村地域ケア体制づくりに関する研究に参加。

科学研究費補助金（代表春山早苗）の交付を受けて，春山氏と共同で先駆的に取り組んできた市町村の保健師活動を把握するため栃木県の馬頭町保健師に面接調査を行った。

③神山幸枝助教授ほかの老年看護学領域の共同研究「脳血管障害患者のセルフケアと地域生活（含家族生活）との関連」に参加。

脳血管障害者の在宅におけるセルフケアの実態と地域生活との関連を知り，脳血管障害者とその家族が地域のなかでより高いQOLを保持しながらセルフケアを行えるような援助方法や，患者や家族を支える効果的な援助方法を検討することが目的である。

今年度は，脳血管疾患の発病患者で退院後1年から3年未満の脳神経外科，神経内科に通院している言語的コミュニケーションのとれる65歳から75歳の患者6名に健康状態，一日の生活状況，現在行っているセルフケア，価値観などのインタビュー調査を実施した。インタビュー結果を逐語録としてまとめ分析予定である。

④川口千鶴教授ほかの小児看護学領域の共同研究「栃木県南部の１市４町（小山市，国分寺町，南河内町，石橋町，上三川町）における小児看護の課題－子どもの健康および医療に対する認識から－」に参加。

対象地域の保健統計資料など，子どもの健康に関する資料収集からの１市４町の地域の現況の把握や，看護の側面から地域の子どもとのかかわり，および小児看護の課題についての認識を調査するため外来などの看護師を対象にしたアンケート調査を計画中である。

３）鈴木久美子，篠澤俔子，島田由美子

平成14年度日本看護協会研究助成金を受けて在宅看護者とその家族を継続援助する訪問看護師が，援助世帯の介護体験と認識をどのようにとらえ，介護家族の肯定的認識を高めるためにどのような援助を行っているかを明らかにし，訪問看護における家族介護の援助方法を検討することを目的に文献検索を行った。

⑷　その他

１）篠澤俔子

①平成14年７月23日，基幹型在宅介護支援センターにおいて，安足地域のケアマネジャー30名を対象に「家族援助の方法」を3時間，講義した。

②平成14年10月19日，小山市教育委員会主催平成14年度自治医科大学看護学部公開講座において，小山市周辺地域住民25名を対象に「高年期に向けての生活の見直し」をテーマに講義をした。

２）鈴木久美子

①南河内町より介護認定審査会委員に委嘱された。

精神看護学

教授　永井優子

⑴　スタッフの紹介

教授　**永井優子**（2002年4月1日就任）

看護学修士，看護師，保健師

千葉県松戸市および千葉県にて保健師として勤務後，千葉大学看護学部助手，愛知県立看護大学講師，助教授（精神看護学）を経て，着任した。

助教授　**西岡和代**（2002年4月1日就任）

修士（リハビリテーション），看護師

自治医科大学附属病院に看護師として勤務後，自治医科大学看護短期大学講師，茨城県立医療大学保健医療学部看護学科講師（精神看護学）を経て，着任した。

助手　**日向朝子**（2002年4月1日就任）

看護学修士，看護師，保健師

北里大学病院，湘南東部総合病院に看護師として勤務後，自治医科大学看護短期大学助手（主として成人看護学実習Dを担当）を経て，着任した。

助手　**関　澄子**（2002年4月1日就任）

看護学準学士，教養学士，看護師

自治医科大学附属病院看護師，小山市役所訪問看護師として勤務後，自治医科大学看護短期大学助手（主として成人看護学実習Dを担当）を経て，着任した。

⑵　教育の概要

当領域では，精神看護学の学士レベルの教育目標として，成長発達段階および健康水準にかかわらず，全ての人（集団を含む）を対象に精神看護の実践に関する基礎的な知識と技術を身につけることを考えている。特に，対象となる人の人権を尊重することや希望を支えることが基盤になるように教育計画を立案している。

永井は，1年次前学期に開講される「看護学概論」では精神の健康状態と日常生活との関係を理解し，看護の役割と機能について理解することを目標として，第3回講義「心身の健康を守る看護の役割・機能Ⅱ―精神看護学の立場から―」を担当した。また，1年次後学期には「成長と発達」において，乳幼児期および学童期・思春期における精神的成長発達を概観し，その特徴について学習することを目標に，第3回，第4回，第5回（前半）に「乳幼児期･学童期･思春期･青年期の精神発達の概要」について講義をした。

また，3年次前期に開講する精神看護学実習の準備に多くの時間をかけた。今年度は実習計画策定費を用いて，県内および近隣地域も含めて，精神科病棟を有する医療機関および精神科デイケア，精神障害者共同作業所等の社会復帰に関する地域資源について「精神看護学実習」施設としての適切性と受け入れの可能性について検討した。精神科病棟を有する病院では，准看護師の教育カリキュラムでも精神看護実習が2週間となったことから，既に多くの実習生を受け入れていた。実習期間を鑑みても実習生を受け入れる余地のある病院の看護部とともに実習の可能性についてさらに検討する必要が大きいことがわかった。地域資源については，ほとんどの施設で実習期間や条件の調整をすることで前向きに検討してできる状態にあり，検討すべき事項が明確になった。なお，「精神看護学概論」で予定している夏季休業中の病院および地域資源の見学課題については，目的に賛同して協力が得られることが見込まれた。

なお，永井は，静岡県立大学看護学部教員と交流をもち，精神看護学領域の看護教員および実践家とともに「精神看護学授業研究会」（年2回程度開催）に関わっている。西岡は，茨城県立医療大学の非常勤講師として，授業科目「精神看護学」において「心の危機と危機介入」について2回（5月10日，5月13日）講義を行った。

⑶　研究の概要

精神看護学領域では，全発達段階を対象に，身体的・精神的・社会的側面から広く人間の精神的諸問題についてあらゆる場面や状況で援助の方法を追求するため，研究も多岐にわたると考える。しかし，教育を主として活動してきたため，今年度は研究に充当する時間が限定され，学会活動を続けることが主となった。

そのなかで，研究課題「自治医科大学附属病院におけるリエゾン精神看護実践の導入に関する基礎的研究－精神看護実践の現状とリエゾン精神看護へのニーズについて－」として看護学領域共同研究費から120,000円の配分をうけ，スタッフ全員で取り組み，本年度内にデータの収集を終えることができた。

永井は，イギリス（ロンドン南西地域）およびスウェーデン（ストックホルム）の地域精神医療

保健福祉について，主に重度精神障害者の地域ケアに焦点を当てて5月18～26日に視察し，今後の地域における精神看護の実践について多くの示唆を得た。

学会活動では，永井は，日本生活指導学会常任理事として，第19回生活指導学会大会（横浜市，8月24～25日）において課題研究「実習教育と生活指導」の企画運営を担当した。また，日本家族看護学会第9回学術集会（岩手県，9月）における会長講演の司会，第7回日本糖尿病教育・看護学会学術集会（名古屋市，10月5～6日）の企画・実行委員を担当した。

また，共同研究として，愛知県立看護大学学長研究費「統合失調症患者の初回退院を迎える親の退院への思いと看護職の支援」，科学研究費補助金（萌芽研究）「精神科における危険防止のための介入技術の開発に関する研究」を行うほか，家族ケア研究所の客員研究員として精神看護学の立場から家族ケアについて教育研究活動を行っている。

⑷　その他

永井および西岡は，依頼を受けて臨床における看護実践者のための教育活動も行っている。永井は，日本看護協会栃木県支部主催の「実習指導者講習会」において「看護論」（6時間），「実習指導の評価」（3時間），および日本精神科看護技術協会主催の「精神科看護実習指導者研修会Ⅱ」において「看護教育課程」（6時間）の講師を担当した。西岡は，上都賀総合病院看護部主催「看護研究研修会」において「看護研究とは」（4月26日）および「看護研究論文の書き方」（9月12日）の2日間講義を担当した。

一般における教育活動として，永井は栃木県立栃木南高等学校「わくわく講義体験」において高校生を対象に「看護学を学ぶ」をテーマに50分間の講義を2回行ったほか，小山市との共催による自治医科大学看護学部公開講座「実りある高齢期をめざして」のなかで「あなたにとって大切なもの」をテーマに講義と演習を行った。

母性看護学

教授　川﨑佳代子

⑴　スタッフの紹介

教授　**川﨑佳代子**（2002年4月1日就任）

学歴：鹿児島大学医学部附属助産婦学校卒，東洋大学社会学部第2部社会学科卒・同修士課程福祉社会システム専攻修了，昭和大学医学部公衆衛生学特別研修生（1999～2001年）。職歴：郵政省東京逓信病院（1965～1966年），神奈川県立衛生短期大学助手（1967～1975年），埼玉県立衛生短期大学講師（1976～1986年），同助教授（1987～1988年）東邦大学医療短期大学教授（1989～1993年），同客員教授（1994～1996年），新潟県立看護短期大学教授（1996～1997年），自治医科大学看護短期大学教授（1998～2002年）。学位：修士（社会学）・博士（医学）。

教授　**成田　伸**（2002年4月1日就任）

学歴：千葉大学看護学部卒業千葉大学大学院看護学研究科修士課程修了。職歴：都立築地産院（1981～1984年），川崎市立高等看護学院（1984～1991年），自治医科大学看護短期大学（1991～1995年），広島大学医学部保健学科看護学専攻助教授（1995～2002年）。学位：看護学修士。社会的活動：日本看護研究学会，日本看護科学学会，日本看護管理学会，日本看護学教育学会，日本更年期医学会評議員，日本看護研究学会編集委員，日本看護協会学術雑誌編集委員，性と健康を考える女性専門家の会副会長。

講師　**早川有子**（2002年4月1日就任）

学歴：静岡済生会附属看護専門学校卒，名古屋大学医学部附属助産婦学校卒，放送大学教養学部卒，明星大学「通信制大学院」人文学研究科教育学専攻修了。職歴：日本大学附属板橋病院（1971～1974年），日本医科大学看護専門学校（1976～1985年），昭和大学看護専門学校（1993～1995年），自治医科大学看護短期大学講師（1995～2002年）。学位：修士（教育学）。所属学会：日本看護科学学会，日本母性衛生学会，日本家族看護学会，日本女性心身医学学会。

講師　**曽我部美恵子**（2002年4月1日就任）

学歴：前橋赤十字高等看護学院卒業，聖母助産婦学院卒業，日本看護協会看護研修学校教員養成

課程卒業，立教大学法学部法学科卒業，東洋英和女学院大学大学院人間科学研究学科修了。職歴：大田原赤十字病院（1971～1974年），社会福祉法人聖母会聖母病院（1976～1982年），自治医科大学附属病院（1982～1983年），自治医科大学附属看護学校（1983～1987年），医療法人社団産育会野口医院（1987～1993年），自治医科大学看護短期大学講師（1997～2002年）。学位：修士（人間科学）。所属学会：日本看護科学学会，日本母性衛生学会，日本女性心身医学学会，日本生命倫理学会。

助手　**木下珠希**（2002年4月1日就任，2003年3月31日退職）

学歴：北里大学看護学部卒，東邦大学医療短期大学専攻科母子看護学専攻修了，北里大学大学院看護学研究科修了。職歴：東邦大学医学部附属大橋病院（1993～1995年），福井医科大学附属病院（1997～1998年），福井医科大学医学部看護学科助手（1999～2000年），自治医科大学看護短期大学専攻科講師（2001～2002年）。学位：修士（看護学）。

助手　**富田真理子**（2002年4月1日就任，2003年3月31日退職）

学歴：自治医科大学看護短期大学看護学科卒，同助産学専攻科修了，放送大学教養学部卒。職歴：富岡地域医療組合公立富岡総合病院（1992～1999年），自治医科大学看護短期大学助手（2000～2002年）。

⑵　教育の概要

１）看護学概論（１単位：15時間，１年次前期開講）

15時間のうち2時間（1コマ）を川﨑が担当し，「母性各期における看護の課題」を学習課題として，女性を中心に据えた健康の概念，思春期から更年期におけるリプロダクティブ・ヘルス／ライツをめざす看護の役割を講義した。レポート課題は，「母性各期の看護の課題について関心のあるテーマを選びあなたの考えを述べなさい」とし，22名の学生が選択してレポートを提出した。

２）現代保健・看護セミナー

川﨑は，大久保祐子講師と9名の学生を担当し，前半は「生活」に焦点を当て，妊婦，子ども，思春期の男性と女性，老後，自分の振り返りなどについて展開し，後半は，女性をめぐる社会，少子化，そして人工妊娠中絶，食物の安全，バリアフリー住宅など多岐な内容について文献を読み，討論を行った。

成田は，朝野春美講師と9名の学生を担当した。前半は各自が「他の人に紹介したいこと」について資料を作成し，紹介した。その話し合いを通して，少子化問題をさらに深く追求することになり，後半は少子化問題に関する資料を各自が収集し，プレゼンテーションを何度か繰り返し，最終的な資料としてまとめた。また，平和を考えようということで，さいたま市にある「ジョン・レノン・ミュージアム」を全員で見学した。

早川は，篠澤俔子教授と8名の学生を担当し，「老人・身体障害者の住みやすい環境」をテーマに，前半は文献学習後，自治医大周辺の駅，道路周辺などを探索し，環境に視点をあてたマップ作りをした。後半は実際に目の不自由な方，車イスを使って生活をしている方の協力を得て，一緒に自治医大周辺を行動する中で住みやすい環境について考えた。最後に本学部のヘルスボランティアの非常勤講師である池上講師の参加を得，老人・身体障害者の環境について一緒に討論し学習を深めた。

曽我部は，田口ヨウ子教授と7名の学生を担当した。スポーツセンターでの運動・保育園の訪問・妊婦と高齢者の模擬体験・自己の食事の評価・VTR聴取・アメリカの看護の現状を調べるなどの体験学習を行った。また，毎回，全員で簡単な手話を学習した。

３）母性看護学概論（１単位：30時間，1年生後期開講）

母性看護学の概念，対象の特性を理解し，保健医療システムの中で果たす看護の役割について理解することを目的に，母性看護学の概念，母性看護の機能と役割，母性の身体的特性，母性の心理的特性，母性の社会的特性（以上9コマを川﨑が担当），母性看護の変遷と諸施策，母性をめぐる生命倫理など（以上6コマを早川が担当）について講義した。

⑶　研究の概要

１）自治医科大学看護学部共同研究費による「栃木県における母乳育児支援の実態調査」の研究計画の策定と実施に，母性看護学教員，専攻科の教員，および国際医療福祉大学臨床医学研究センタ

ー佐藤郁夫教授・自治医科大学医学部松原茂樹教授を共同研究者として加えて取り組んだ。その結果は，「栃木県における母乳育児支援の実態調査」（途中経過報告書）としてまとめた。

２）成田，木下，富田は，平成14～15年度文部科学省科学研究費補助金による「産婦のモニタリングにおける助産婦と産科医の日本型協同作業モデルの開発に関する研究」を行っている（研究代表者：成田）。本研究は引き続いて行っているテーマであり，平成14年度には研究成果の中間報告をウィーンで行われたICM（国際助産師連盟）学術集会において発表した。また研究の継続として，国内で産科を標榜する300床以上の病院に対する助産師と産科医の共同作業の実態調査を行った。

３）成田は，広島大学水流聡子助教授，日本赤十字社医療センター村上睦子副看護部長らとともに「助産サービス研究会」を立ち上げ，継続して研究を行っている。平成14年度には，これまでの研究成果をウィーンで行われたICM（国際助産師連盟）学術集会において発表した。

４）成田は，平成12～14年度文部科学省科学研究費補助金による「母性看護学・助産学領域における教育教材の開発－周産期診断・分娩介助モデルのAugmented Realityの開発と教育効果－」（代表者：前原澄子）に共同研究者として参加した。平成14年度は，助産学教育を行っている各教育施設における開発した教材の視聴および調査を行い，その教育効果について検証を行った。また，ウィーンで行われたICM（国際助産師連盟）学術集会において開発した教材の紹介を行い，好評を博した。

５）早川は，新生児のアセスメントに関連するCAI（Computer Assisted Instruction）教材の開発・修正・評価の研究を継続している。

６）早川は，自治医科大学産婦人科教室の鈴木光明教授と松原茂樹教授の指導を受けて，褥婦の食べた食品と母乳の味の変化についての研究を行っている。

⑷　その他

１）川崎は，第7回栃木県母性衛生学会および第17回母乳哺育学会で座長を担当した。

２）川崎は，第17回母乳哺育学会において理事に就任した。

３）川崎は，2002年5月から栃木県社会教育委員の委嘱を受け，年3回の会議において，行政への提言を行っている。2003年中には提言をまとめる予定である（～2003年3月）。

４）成田は，2002年11月9日小山市教育委員会と共催で行われた自治医科大学看護学部公開講座において「パートナーと共に生きる」というテーマで講演を行った（2002年11月9日）。

小児看護学

教授　川口千鶴

⑴　スタッフの紹介

教授　**川口千鶴**（2002年4月1日就任）

学歴：1976年聖路加看護大学衛生看護学部卒業，1996年聖路加看護大学大学院看護学研究科前期博士課程修了。職歴：聖路加国際病院小児病棟看護婦として勤務の後，聖路加看護大学小児看護学助手，講師。東京女子医科大学看護学部助教授。所属学会：日本小児看護学会，日本看護科学学会，日本小児保健学会，聖路加看護学会，日本看護教育学会。

講師　**加藤晶子**（2002年4月1日就任）

学歴：1976年日本赤十字武蔵野短期大学看護科卒業，1981年神奈川県立看護教育大学校専門看護学科小児看護課程修了，2000年聖徳大学大学院児童学研究科修士課程修了，職歴：1976年武蔵野赤十字病院看護婦として勤務，1977年自治医科大学附属病院勤務（主な配属場所：小児病棟・小児科病棟），1993年自治医科大学看護短期大学小児看護学講師。所属学会：日本小児看護学会，日本小児保健学会，日本医療保育学会。

講師　**朝野春美**（2002年4月1日就任）

学歴：1979年名古屋保健衛生大学衛生学部卒業，1999年筑波大学教育研究科修士課程修了。職歴：自治医科大学附属病院勤務（配属場所：小児病棟・小児科病棟），1995年自治医科大学看護短期大学講師。所属学会：日本小児看護学会，日本小児保健学会，日本小児心身医学会，日本子どもの虐待防止研究会，日本摂食・嚥下リハビリテーション学会。

⑵　教育の概要

１）川口は，「小児看護学概論」15時間のほか，「看護学概論」において小児看護学部分を2時間と

「成長と発達」における小児期部分4時間の講義を担当した。また，川口，加藤，朝野は，現代保健・看護セミナー（30時間）において，学生の教育に関わった。このほか，看護学部開設初年度のため，小児看護学の教育に関する検討を行った。

⑶　研究の概要

１）川口，加藤，朝野は，看護学部共同研究として，「自治医大周辺地域一市四町における小児看護の課題」を明らかにするために，県南地区二市十町の健康福祉センター，健康福祉課等を訪問し，地区調査を行った。

２）川口は，平成13～15年度文部省科学研究費補助金による「乳幼児の事故に関する養育者の要因に関する研究」（代表者：日沼千尋）に共同研究者として参加し，平成14年度は事故防止の介入を行った。

３）川口は，平成14～17年度文部省科学研究費補助金による「子どもの在宅ケアのための組織的プログラムの開発」（代表者：及川郁子）に共同研究者として参加し，平成14年度は文献検討を行った。

⑷　その他

川口，加藤，朝野は，むつみ愛泉幼稚園における就園前幼児およびその保護者を対象とした子育て相談事業「ぴよぴよキッズ」の講師を担当した。

成人看護学

教授　塚越フミエ

⑴　スタッフの紹介

教授　**塚越フミエ**（2002年4月1日就任）

学歴：聖路加看護大学卒業，東洋英和女学院大学大学院人間科学研究科修了（人間科学修士）。職歴：聖母病院，東京大学医科学研究所附属病院，北里大学東病院にて臨床実践。北里大学看護学部基礎看護学講師，愛知県立看護大学成人看護学助教授，東京女子医科大学看護学部成人看護学教授。

助教授　**小平京子**（2002年4月１日就任）

学歴：国立栃木病院附属看護学校卒業，神奈川県立看護教育大学校看護教育学科卒業，放送大学卒業，東洋英和女学院大学大学院人間科学研究科修了。職歴：国立病院，自治医科大学附属病院にて臨床経験。自治医科大学附属看護学校専任教員，自治医科大学看護短期大学助手，同講師，同成人看護学助教授。

講師　**中村美鈴**（2002年4月１日就任）

学歴：東洋大学社会学部社会学科卒業，東洋大学大学院社会学部研究科福祉社会システム専攻修士課程修了，東京医科歯科大学大学院医学系研究科保健衛生学専攻成人看護学専攻生修了，大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻看護実践開発科学分野博士課程。職歴：東京医科歯科大学医学部附属病院看護師，聖母女子短期大学成人看護学講師，杏林大学保健学部成人・高齢者看護学講師。

助手　**村上礼子**（2002年4月1日就任）

学歴：自治医科大学看護短期大学看護学科卒業，放送大学教養学部卒業，明星大学大学院教育学研究科修了。職歴：自治医科大学附属病院看護師，自治医科大学看護短期大学助手。

助手　**友竹千恵**（2002年４月１日就任）

学歴：自治医科大学看護短期大学看護学科卒業，神戸市看護大学看護学研究科慢性病在宅管理論専攻修了。職歴：自治医科大学附属病院勤務。

⑵　教育の概要

1年次の成人看護学概論2単位（30時間）を開講した。塚越が13コマ，小平が2コマを担当した。

学習目的は，成人がもつ健康問題とそれに対応する看護の役割とその理論について理解するとした。目標は，1．成人期にある人々の社会的役割や生活の状況から疾病とその傾向を理解する，2．継続的で一貫性のある看護ケアが提供できるように成人看護学に役立つ理論や方法を学習するとした。

授業は講義を中心に行った。目標1の具体的な内容としては，成人看護学の役割とその範囲，健康問題と健康の諸段階について講義した。引き続き成人の健康問題として，免疫と感染看護，がん看護，薬物依存と看護，ショックと看護，手術を受ける人の看護について，講義した。

成人看護学に利用できる理論として，ホメオスタシス，ストレス，適応，危機理論，セスフケア理論，ケアリングについて講義した。

全体のまとめとなるように，急性期，慢性期，リハビリテーション期，ターミナル期の看護の特徴と方法について講義し，最後に闘病記を読んでディスカッションを行い，まとめた。

⑶　**研究の概要**

１）研究課題「自治医科大学附属病院の外来に通院する2型糖尿病患者のセルフケアの実態と生活に根ざした支援に向けた看護の課題」

食生活，交通手段の変化，ストレスの増大，人口の高齢化，医療の高度化に伴い，生活習慣病である2型糖尿病患者は増加傾向にある。糖尿病のコントロールは，食事や運動など生活習慣を改善し，その実行を継続するセルフケアが中心である。2型糖尿病患者にとって，糖尿病のコントロールを図ることやその人らしい生活を送るために，糖尿病とともにある生活を目指していけるケアを提供する看護の専門職が必要である。本研究の目指すところは，糖尿病患者を健康生活の推進者として位置づけ，糖尿病患者の支援を通して家族・地域・社会へと働きかけを広げて，生活習慣全体の改善を図ることである。その第一段階として，今年度は大学病院の外来に通院する糖尿病患者の血糖コントロールとそれに関わる要因を把握するため，調査票をもとに外来カルテを調査した。その結果は，『平成14年度自治医科大学看護学部紀要創刊号』に掲載した。また，調査結果をふまえ，量的研究では捉えきれないセルフケア，特に家庭や地域社会で生活する患者が負担や困難に感じていることに着目し，10名の患者に半構成的インタビュー調査を実施した。現在，テープを逐語録に起こし，質的方法によって分析中である。

老年看護学

助教授　神山幸枝

⑴　**スタッフの紹介**

助教授　**神山幸枝**（2002年4月1日就任）

看護師免許取得，保健師免許取得，助産師免許取得。学歴：日本医科大学附属看護学校卒業，東京都立公衆衛生学院保健婦科卒業，東京都立公衆衛生学院助産婦科卒業，東洋英和女学院大学大学院人間科学研究科修士課程修了（人間科学修士）。職歴：日本医科大学附属病院外科病棟勤務，自治医科大学附属病院産婦人科病棟勤務，自治医科大学附属看護学校専任教員，自治医科大学看護短期大学専任教員（成人看護学，地域老人看護学）。

講師　**髙木初子**（2002年4月1日就任）

山梨県出身。学歴：日本看護協会教員養成課程修了，山梨大学大学院教育学研究科修士課程修了。職歴：山梨県立中央病院中央手術室，外科病棟勤務。山梨県立看護短期大学助手（基礎看護学），山梨県立看護大学助手（老年看護学）。

助手　**内海香子**（2002年4月1日就任）

看護師免許取得，助産師免許取得，保健師免許取得。学歴：北海道大学医療技術短期大学部看護学科卒業，天使女子短期大学専攻科衛生看護学専攻修了，法政大学文学部卒業，文部省高等教育局看護教育指導者研修（千葉大学看護学部），千葉大学大学院看護学研究科修了，千葉大学看護学部科目等履修生・研究生（老年看護学教育研究分野）修了。職歴：北海道大学医療技術短期大学部看護学科助手（老人看護学），青森県立保健大学看護学科非常勤講師（成人臨床看護学），北海道大学医学部附属病院第二内科，内視鏡室，産科・NICU，第三内科勤務。

⑵　**教育の概要**

神山は渡邉教授，髙木は川口教授と組んで，１学年の学生を対象に，現代保健・看護セミナーを担当した。

⑶　**研究の概要**

神山，髙木，内海は，看護学部領域共同研究費の補助を受け，高齢脳血管障害患者のセルフケアと地域生活（含む家庭生活）との関連について研究を行っている。2002年度は調査対象の選定，データ収集を行い，質的帰納的に分析している。共同研究者は，篠澤俔子教授，余語琢磨講師，野口美和子学部長である。

内海は，平成13年度日本看護協会研究助成金を受け，「高齢者糖尿病患者のインスリン使用上の問題点と援助に関する研究」を清水安子（千葉大学看護学部），湯浅美千代（前千葉大学看護学部），黒田久美子（平塚共済病院），野口美和子（自治医科大学看護学部），大神ヨシ子，横山のぶ子，鳥飼紀子（玄々堂君津病院看護部）と共同研究を行っている。また，内海は，上記研究の共同研究者と「虚血性心疾患を合併する糖尿病患者の疾病の認識と学習ニーズに基づいたグループ指導プログラムの作成」について研究を行っている。なお，共同研究者である横山のぶ子は，この研究に対して循環器学研究振興財団より平成13年度研究助成金を受けている。

研究業績録

学部長

⑴　原著論文

１）松田典子，湯浅美千代，**野口美和子**：入院・入所している難聴高齢者の難聴に由来する思いと看護援助．千葉看護学会会誌，8(2);15-22，2002.

一般基礎

⑴　原著論文

１）大井けい子，富田真理子，**髙村寿子**：妊娠期の性生活－妊婦とその夫の性の認識と満足の差異：セクシュアリティの変容－．女性心身医学，7(2);220-225，2002.

２）土屋紀子，高橋春江，内田純枝，海野英恵，横田明美，宮原郁子，**渡邉亮一**：看護師と就労女子における喫煙行動の比較検討－心理社会学的認知行動の要因が喫煙行動に与える影響を探る－．高知医科大学紀要，18;85-100，2002.

⑵　学会発表

１）久宮フジ，加藤則子，松井町子，宮本加代子，鳥居みゆき，室橋正江，飯田悦子，但木恵美子，**髙村寿子**：地域保健従事者のエンパワーメントの強化に関する一考察－地域住民支援者である保健師・栄養士の意識調査から－．第11回日本健康教育学会，東京，2002年8月24日（第11回日本健康教育学会講演集　138-139，2002）.

２）川村和枝，佐々木健，宮崎　栄，**髙村寿子**：主体的な行動変容を支える新健康教育プログラムの開発と評価－第1報 新健康教育プログラムの概要－．第11回日本健康教育学会，東京，2002年8月24日（第11回日本健康教育学会講演集　142-143，2002）.

３）佐々木健，川村和枝，宮崎　栄，**髙村寿子**：主体的な行動変容を支える新健康教育プログラムの開発と評価－第2報　育児中の母親へ適用した効果－．第11回日本健康教育学会，東京，2002年8月24日（第11回日本健康教育学会講演集　144-145，2002）.

４）松沼瑞枝，小林典子，堀江　標，半田冨美子，田辺幸子，葭葉敬江，**髙村寿子**：思春期ピアカウンセリングの有効性－ピア受講群と未受講群の比較検討から－．第21回日本思春期学会総会学術集会，金沢市，2002年8月24日（第21回日本思春期学会総会学術集会抄録集　80，2002）.

５）川瀬良美，森　和代，**髙村寿子**，松本清一：大学生の月経前症状のpre-menstrualとperi-menstrualによる類型化．第31回日本女性心身医学会学術集会，東京，2002年8月25日（第31回日本女性心身医学会学術集会講演集　27，2002）.

６）土屋紀子，**渡邉亮一**：看護師喫煙対策とセルフエフィカシー要因の関連．第61回日本公衆衛生学会総会，さいたま市，2002年10月24日（第61回日本公衆衛生学会総会抄録集 219，2002）.

７）梅里良正，前田幸宏，鈴木荘太郎，**渡邉亮一**，有賀　徹，池田俊也，佐藤正子，山内一信，石川澄，山本修三，大道　久：急性期病院における入院症例標準化データセットの開発に関する研究．第40回日本病院管理学会学術総会，北九州市，2002年11月2日（第40回日本病院管理学会学術総会抄録 215，2002）.

８）梅崎高行，**余語琢磨**，小堀哲郎，村田敦郎：祭り・共同体・個人－新参者の加入によって生じる祭り集団の変容と未来像－．日本生活学会第29回秋季研究発表大会，東京，2002年12月8日（生活学会報　29(1);34-36，2002）.

⑶　著書・総説

１）**髙村寿子**，渡辺純一：ピアカウンセリング－共感・共有で仲間の自己決定を支援する－．児童心理，56(12);167-156，2002.

２）**髙村寿子**：性感染症予防教育としてのピアカウンセリング．母子保健情報，45;70-78，2002.

３）**髙村寿子**：主体的な行動変容とセルフエフィカシィ（自己効力感）－ヘルスプロモーションのための新戦略．健康管理，574;6-32，2002.

４）**渡邉亮一**：医学医療情報学とは何か．医学図書館，49(4);311-316，2002.

⑷　その他

１）**渡邉亮一**：医療情報（北川高嗣，須藤 修，西垣　通，浜田純一，吉見俊哉，米本昌平編）：情報学事典，69，弘文堂（東京），2002.

２）**渡邉亮一**：情報管理．埼玉県看護協会看護管理者研修会（ファーストレベル），さいたま市，2002年6月28日.

３）**余語琢磨**：須恵器窯構造研究の視点－実験と民俗資料から技術史を読み解くための試論Ⅰ．土

曜考古学研究会6月例会，さいたま市，2002年6月15日．

専門基礎

⑴　原著論文

１）小笠原拓郎，松岡孝栄，**竹田俊明**：ニューラルネットワークによる漢方薬処方支援システムの開発．信学技報，MBE 2001-189 (2002-3);43-47, 2002.

⑵　学会発表

１）小笠原拓郎，松岡孝栄，**竹田俊明**：漢方薬処方支援システムにおける最適中間層ユニット数の探索．2002年電子情報通信学会総合大会，東京早稲田大学大久保キャンパス，2002年3月27日～30日（Proc. IEICE General Conf., 97, 2002）.

２）Hiramatsu,T.，Ohki,M.，Xiong,G.，**Takeda,T.** and Nagao,S.：Effects of chemical lesions of the lobulus petrosus of paraflocculus on the dynamic characteristics and adaptability of primate smooth pursuit eye movement．32nd Annual Meeting for Society for Neuroscience，Orland，Florida，Nov. 2-7，2002（Soc Neursci Abstract 28;766.6，2002）.

⑶　著書・総説

１）**竹田津文俊**，小平京子：病態生理　血液疾患Ⅳ，悪性リンパ腫，白血病類縁疾患．月刊ナーシング，22(4);94-105，2002.

２）**竹田津文俊**，神山幸枝：病態生理　消化管疾患Ⅰ，消化管の解剖と機能．月刊ナーシング，22(6);92-102，2002.

３）**竹田津文俊**，神山幸枝：病態生理　消化管疾患Ⅱ，食道炎，食道びらん，食道潰瘍，食道がん．月刊ナーシング，22(7);94-101，2002.

４）**竹田津文俊**，中村美鈴：病態生理　消化管疾患Ⅲ，胃潰瘍（胃・十二指腸潰瘍），慢性胃炎，胃がん．月刊ナーシング，22(8);92-101，2002.

５）**竹田津文俊**，中村美鈴：病態生理　消化管疾患Ⅳ，クローン病，潰瘍性大腸炎，大腸がん．月刊ナーシング，22(9);92-101，2002.

６）**竹田津文俊**，里光やよい：病態生理　代謝異常Ⅰ，糖代謝のメカニズムとインスリンの働き．月刊ナーシング，22(10);94-102，2002.

７）**竹田津文俊**：血液・造血器疾患の理解．Nursing Selection　血液・造血器疾患（竹田津文俊，伊藤正子監修）．学習研究社（東京），67-112，2002.

８）**竹田津文俊**，里光やよい：病態生理　代謝異常Ⅱ，糖尿病．月刊ナーシング，22(11);92-100，2002.

９）**竹田津文俊**，里光やよい：病態生理　代謝異常Ⅲ，脂質代謝．月刊ナーシング，22(13);94-104，2002.

10）**竹田津文俊**，中村美鈴：病態生理　代謝異常Ⅳ，高脂血症．月刊ナーシング，22(14);94-103，2002.

⑷　その他

１）**竹田俊明**：看護短期大学教育・研究活動の充実・変革期　「研究活動」．自治医科大学創立三十周年記念誌，169-170，2002.

基礎看護学

⑴　原著論文

１）清水裕子，**野中　靜**，大学和子：基礎看護技術演習における技術習得に関する研究－学生の自己評価と他者評価の検討．聖母女子短期大学紀要，15;39-51，2002.

２）清水裕子，大学和子，**野中　靜**：基礎看護技術実技試験におけるSPを導入したOSCEの試み．聖母女子短期大学紀要，15;53-63，2002.

⑵　学会発表

１）渡部真奈美，小平京子，**豊田省子**，島田由美子，**田口ヨウ子**：継続性のある成人看護学実習指導の試み－学習困難な学生に対する継続的な指導．第12回日本看護学教育学会学術集会，札幌市，2002年7月31日（日本看護学教育学会誌（講演集録）204，2002）.

２）駿河絵理子，峯岸由紀子，横山和代，**菅野こずえ**：健康成人を対象としたリフレクソロジーによるリラックス反応の評価．第33回日本看護学会（看護総合），広島市，2002年7月11日（日本看護学会集録；看護総合論文集　33;218-220，2002）.

３）**大久保祐子**，小長谷百絵，小川鑛一：足板で足の動きを止めたときの背上げ背下げの影響－背

部･臀部･足板の力測定と頭部・足部の変位測定を通して．第28回日本看護研究学会，横浜市，2002年8月９日（日本看護研究学会誌　25(3）;383，2002）．
４）小長谷百絵，**大久保祐子**，小川鑛一：ベッドの背上げが身体に与える影響－臀部から上背部の皮膚表面にかかる水平力の向きについて．第4回日本褥瘡学会，金沢市，2002年8月31日（日本褥瘡学会誌　4(2);308，2002）．
５）**大久保祐子**，小長谷百絵，小川鑛一：ベッドの背下げが身体に与える影響－臀部から背部の皮膚表面にかかる水平力の向きについて．第4回日本褥瘡学会，金沢市，2002年8月31日（日本褥瘡学会誌　4(2);309，2002）．
６）小長谷百絵，**大久保祐子**：ベッドの背上げ背下げによる身体のずり落ち防止に関する研究－足底を固定する効果の検討．第22回日本看護科学学会，東京，2002年12月７日（日本看護科学学会講演集　467，2002）．

⑶　**著書・総説**
１）**野中　靜**：高齢者の便秘対策．生活習慣病予防と高齢者ケアのための栄養指導マニュアル（日本栄養士会監修；中村丁次・吉池信男・杉山みち子編著）．第一出版（東京），168-169，2002．
２）大河原千鶴子，酒井一博編，**大久保祐子**ほか：ヘルスケアワークを支える看護の人間工学．医歯薬出版（東京），2002．
３）**里光やよい**：なぜに答える看護手技「血圧測定」．エキスパートナース，18(7);108-112，2002．
４）竹田津文俊，**里光やよい**：糖代謝のメカニズムとインスリンの働き－代謝異常１．月刊ナーシング，22(10);94-102，2002．
５）竹田津文俊，**里光やよい**：糖尿病－代謝異常2．月刊ナーシング，22(11);92-99，2002．
６）竹田津文俊，**里光やよい**：脂質代謝－代謝異常3．月刊ナーシング，22(13);94-104，2002．

⑷　**その他**
１）**野中　靜**，若尾ふさ：基礎看護学のおける模擬患者(ＳＰ)参加型授業の試み．看護教育，43(10);842-844，2002．
２）大学和子，清水裕子，**野中　靜**：看護技術における模擬患者(SP)を導入した客観的臨床能力試験(OSCE)の実践報告．看護教育，43(10);845-846，2002．

地域看護学

⑵　**学会発表**
１）**鈴木久美子**：家族介護者の介護にかかわる肯定的認識と看護援助のあり方．第5回日本地域看護学会学術集会，高知市，2002年6月23日（日本地域看護学会第5回学術集会講演集　184，2002）．
２）**鈴木久美子**：住民同士の交流を促進する保健師の役割．第61回日本公衆衛生学会総会，さいたま市，2002年10月24日（第61回日本公衆衛生学会総会抄録集　492，2002）．

精神看護学

⑵　**学会発表**
１）**永井優子**：実習における倫理および人権擁護に関する教育について．日本生活指導学会第20回大会，横浜市，2002年8月24日（発表要旨集録17-18，2002）．

⑶　**著書・総説**
１）**永井優子**：患者の病識，受容を支える技術．実践看護技術学習支援テキスト精神看護学（野嶋佐由美監修）．日本看護協会出版会（東京），56-67，2002．
２）**永井優子**：援助関係を構築する技術．実践看護技術学習支援テキスト精神看護学（野嶋佐由美監修）．日本看護協会出版会（東京），68-84，2002．
３）**永井優子**：統合失調症の人の看護．実践看護技術学習支援テキスト精神看護学（野嶋佐由美監修）．日本看護協会出版会（東京），267-289，2002．
４）**永井優子**：アルコール依存症にある人に対する看護．実践看護技術学習支援テキスト精神看護学（野嶋佐由美監修）．日本看護協会出版会（東京），301-311，2002．

⑷　**その他**
１）**永井優子**：看護図書館（員）に望むこと．看護図書館協議会第2回新人研修会，自治医科大学

地域医療情報研修センター，2002年12月14日．

母性看護学

⑴　原著論文

１）**早川有子，川﨑佳代子**：日本における看護大学及び看護短期大学のCAI教材の実態．Quality Nursing，8(8);691-698，2002．

２）**成田　伸**：思春期の性と健康．産婦人科治療，84(2);144-146，2002．

３）交野好子，田邊美智子，住本和博，**成田　伸**，野村紀子，石村由利子，前原澄子：分娩期における母体内現象の理解に関する研究．日本母性看護学会誌，2(2);55-60，2002．

４）坂梨　薫，**成田　伸**，水流聡子，齋藤いずみ，村上睦子，中根直子，赤山美智代，河口真奈美，中西睦子：分娩第1期における助産婦のケア形態と母体・胎児のリスクとの関係．母性衛生，43(2);236-242，2002．

５）植田喜久子，滝口成美，宮武広美，吉野純子，飯村富子，野村美香，近藤真紀，中信利恵子，藤田佳子，永井真由美，五嶋育子，**成田　伸**：壮年期女性のライフスタイル指標の開発－信頼性および妥当性に関する検討．日本赤十字広島看護大学紀要，2;55-63，2002．

⑵　学会発表

１）Narita,S., Tsuru,S., Sakanashi,K., Saito,I., Nakane,N., Akayama,M. and Murakami,M.：Challenge of one hospital in Japan during last decade to provide the human midwifery care with high safety. International Confederation of Midwives 26th International Congress, Vienna, Apr. 16, 2002（Proceedings CD-ROM, Vienna 2002, Book of Proceeding）.

２）Saito,I., Narita,S., Sakanashi,K., Tsuru,S., Murakami,M., Nakane,N. and Akayama,M.：Analysis of Health Statistic Later Half 20th Century in Japan. International Confederation of Midwives 26th International Congress, Vienna, Apr. 16, 2002（Proceedings CD-ROM, Vienna 2002, Book of Proceeding）.

３）Sakanashi, K., Tsuru, S., Narita, S., Saito,I., Murakami,M., Nakane,N. and Akayama,M.：Supportive care in skills of Japanese midwives. International Confederation of Midwives 26th International Congress, Vienna, Apr. 15, 2002（Proceedings CD-ROM, Vienna 2002, Book of Proceeding）.

４）Tsuru,S., Narita,S., Murakami,M., Sakanashi, K., Saito,I., Nakane,N., Akayama, M. and Nakanishi, M.：Relationships among Midwifery Care, Trend of Birth Rate, Medical Resources and Consumer's View. International Confederation of Midwives 26th International Congress, Vienna, Apr. 15, 2002（Proceedings CD-ROM, Vienna 2002, Book of Proceeding）.

５）Iwata,H., Sakahara,J., Hinohara,K., Endo,K., Maehara,S., Nonoyama,M., Misumi,J., Suzuki,S., Narita,S. and Matsubara,M.：The cognition of Japanese midwives about supporting breastfeeding at hospitals. International Confederation of Midwives 26th International Congress, Vienna, Apr. 16, 2002（Proceedings CD-ROM, Vienna 2002, Book of Proceeding）.

６）Narita,S., Katano,Y., Sumimoto,K., Tanabe,M., Nomura,N., Ishimura,Y. and Maehara,S.：The Development of Teaching Material Using Virtual Reality to Support Midwifery Students Learning about the Phenomenon during Labor and Delivery. International Confederation of Midwives 26th International Congress, Vienna, Apr. 16, 2002（Proceedings CD-ROM, Vienna 2002, Book of Proceeding）.

７）Yoshino,J., Ueda,K., Takiguchi,N., Iimura,T., Miyatake,H. and Narita,S.：The Image of Menopause in Japanese Middle-aged Women： From Life Courses. International Council on Women's Health Issues, The 13th Annual Conference, Seoul, Jun. 27, 2002（Abstracts 300, 2002）.

８）Ueda,K., Yoshino,J., Takiguti,N., Iimura,T., Miyatake,H. and Narita,S.：The comparison between menopausal symptoms and life style in life courses of Japanese middle aged women. International Council on Women's Health Issues, The 13th Annual Conference, Seoul, Jun. 27, 2002（Abstracts 302, 2002）.

９）山内有子，**早川有子**：食物摂取による乳汁糖

度の変化．第17回日本母乳哺育学会，宇都宮市，2002年9月18日．
10）蛭沼留美子，杉田昌子，**早川有子**：生・冷蔵・冷凍母乳の味の変化－甘味・塩味・酸味・PHを味覚センサーで測定して－．第27回栃木県母性衛生学会，宇都宮市，2002年6月28日．
11）**曽我部美恵子**：人工妊娠中絶における意思決定に関連する要因の分析．第31回日本女性心身医学会学術集会，東京，2002年８月25日．

⑶　**著書・総説**

１）**成田　伸**：注射と看護．考える基礎看護技術Ⅱ－看護技術の実際（第2版）（坪井良子，松田たみ子編）．廣川書店（東京），439-455，2002．
２）**成田　伸**：成熟期の健康と看護．母性看護学（氏家幸子監修）．廣川書店（東京），46-53，2002．
３）**成田　伸**：更年期の健康と看護．母性看護学（氏家幸子監修）．廣川書店（東京），54-60，2002．
４）**成田　伸**：妊娠期の看護．母性看護学（氏家幸子監修）．廣川書店（東京），61-104，2002．
５）**成田　伸**：更年期，老年期の看護技術．母子看護技術Ⅰ（氏家幸子監修）．廣川書店（東京），22-27，2002．
６）**成田　伸**：助産診断とは何か．助産学講座5助産診断・技術学Ⅰ（武谷雄二，前原澄子編集）．医学書院（東京），2-14，2002．
７）**成田　伸**，植田喜久子，吉沢豊余子：ホルモン補充療法を経験する女性への系統的な看護面接プログラム開発に関する研究．平成11‐13年度文部省科学研究費補助金報告書（基盤研究(C)(2)），2002．
８）**曽我部美恵子**：10代・20代の人工妊娠中絶と精神面への影響．日本医事新報，4093;95，2002．
９）中村美鈴，**川﨑佳代子**：看護過程セミナー子宮筋腫患者の看護．ナーシングカレッジ，6(16)；24～37，2002．

⑷　**その他**

１）**成田　伸**：「男性助産師と助産実践」に参加して．看護，54(9);77-80，2002．
２）**成田　伸**：思春期の親子関係－自律していく子どもを見守り支援する－．第26回栃木県母性衛生学会・栃木県小児保健会合同研修会・第14回とちぎ思春期研究会研修会講演，2002年10月5日（栃木母性衛生，29;61-62，2002）．
３）杉田昌子，蛭沼留美子，**早川有子**：生・冷蔵・冷凍母乳の味の変化－甘味・塩味・酸味・PHを味覚センサーで測定して－，栃木母性衛生（とちぼ），29;22-31，2002．
４）**早川有子**：会陰切開と会陰縫合－症例紹介およびアンケート調査より－．第22回栃木県周産期医療研修会，栃木県，2002年9月18日．
５）**川﨑佳代子**，**早川有子**，**曽我部美恵子**ほか：母性看護学．2003年版系統別看護師国家試験問題集　解答と解説．医学書院（東京），2002．

小児看護学

⑵　**学会発表**

１）**加藤晶子**，**朝野春美**：小児看護学実習における受け持ち患児の看護診断リストの実態－3年間の看護要約の分析－．日本小児看護学会，横浜市，2002年7月27日（日本小児看護学会第12回学術集会講演集　96-97，2002）．
２）及川郁子，平林優子，横山由美，鈴木里利，**川口千鶴**，鈴木千衣，小原美江，石井由美：小児の外来看護研修会の意味－気管支喘息をもつ子どもへの外来ケアモデルの作成過程を通して－．日本小児看護学会，横浜市，2002年7月27日（日本小児看護学会第12回学術集会講演集　206-207，2002）．
３）横山由美，及川郁子，平林優子，島田珠美，佐々木静枝，**川口千鶴**：小児の在宅療養のために訪問看護ステーションが提供できるサービス．日本小児保健学会，神戸市，2002年10月12日（第49回日本小児保健学会講演集　236-237，2002）．
４）平林優子，及川郁子，横山由美，鈴木里利，**川口千鶴**，鈴木千衣，小原美江，石井由美：喘息児に対する外来看護ケアモデルの作成．日本小児保健学会，神戸市，2002年10月12日（第49回日本小児保健学会講演集　286-287，2002）．
５）澤田和美，**川口千鶴**，奥野順子，石川眞里子，日沼千尋，谷水敏子，平川　歩：乳幼児の事故に関連する要因－乳幼児健診との関連．日本小児保健学会，神戸市，2002年10月12日（第49回日本小児保健学会講演集　496-497，2002）．

⑷　**その他**

１）奥野順子，**川口千鶴**，日沼千尋，澤田和美，

石川眞里子：乳幼児の事故の実態と対応－一地域における事故の経験から－．日本小児看護学会誌，11(1)；37-43，2002.

成人看護学

⑵　学会発表

１）松島沙知，阿彦由紀，柿崎朋子，**中村美鈴**：老夫婦における配偶者の介護疲労度に関する研究，介護保険導入後のCFSI調査から．第28回日本保健医療社会学会，東京，2002年5月19日（日本保健医療社会学会論集　13;67，2002）.

２）島村忠義，菅野一夫，**中村美鈴**，千葉京子：糖尿病患者の血糖値における変化のパターンと社会階層性の違いに関する研究．第28回日本保健医療社会学会，東京，2002年5月19日（日本保健医療社会学会論集　13;78，2002）.

３）**中村美鈴**，鈴木英子，福山清蔵：看護師の「ゆらぐ」場面に関する研究．第28回日本看護研究学会，横浜市，2002年8月9日（日本看護研究学会雑誌　25(3);255，2002）.

４）鈴木英子，**中村美鈴**，福山清蔵：看護師の「ゆらぐ」プロセスに関する研究．第28回日本看護研究学会，横浜市，2002年8月9日（日本看護研究学会雑誌　25(3);256，2002）.

５）千葉京子，**中村美鈴**，長江弘子：大腿骨頚部骨折術後高齢者の「生活の折り合い」に関する研究－退院３ヶ月後の心的プロセス－．第7回日本老人看護学学会，東京，2002年11月3日（日本老人看護学学会抄録集　57，2002）.

６）棚橋美樹，金井美紀，**中村美鈴**：重症患者が持つニーズと看護職の認識に関する研究．第22回日本救急看護学会，東京，2002年11月21日（日本救急看護学会雑誌　14(1);104，2002）.

７）**中村美鈴**，千葉京子，長江弘子：大腿骨頚部骨折術後高齢者の「生活の折り合い」に関する研究　－退院6ヶ月後の心的プロセス－．第22回日本看護科学学会，東京，2002年12月7日（日本看護科学学会学術集会講演集　230，2002）.

８）**友竹千恵**：2型糖尿病と診断されたことの受け止め．第7回日本糖尿病教育・看護学会学術集会，愛知県．2002年10月5日（日本糖尿病教育・看護学会誌6巻特別号；74，2002）.

９）**友竹千恵**，高田早苗：2型糖尿病と診断された壮年期患者の療養法実践への取り組み．第22回日本看護科学学会学術集会，東京，2002年12月6日（第22回日本看護科学学会学術集会講演集143，2002）.

⑶　著書・総説

１）**小平京子**：Nursing Selection５　血液・造血器疾患（竹田津文俊，伊藤正子監修）．学習研究社（東京），2-10，29-66，187-189，2002.

２）島田由美子，**小平京子**：脳出血患者の看護．ナーシングカレッジ，6(5);26-39，2002.

⑷　その他

１）千葉京子，**中村美鈴**，長江弘子：大腿骨頚部骨折術後高齢者が退院1ヶ月後までに「生活の折り合いに」に向かう心的過程，木村看護教育振興財団研究助成論文集，81-92，2002.

２）日沼千尋，田中美恵子，諏訪茂樹，合田信子，小笠原広美，片桐康雄，加藤登紀子，菊池昭江，久米美代子，**塚越フミエ**，真嶋朋子：本学部のカリキュラム評価－6つの教育目標の到達度に関する第1回生の自己評価を中心として－．東京女子医科大学看護学部紀要，5;57-65，2002.

３）**塚越フミエ**：クライアントにおける死の受容と援助．月刊福祉，6;94-97，2002.

４）**中村美鈴**，城戸良弘：胃切除術後患者の栄養状態回復と食生活行動に関する研究．文部科学省研究助成費萌芽研究平成14年度活動報告書，2002.

５）竹田津文俊，**中村美鈴**：納得病態生理　胃潰瘍・慢性胃炎・胃がん．月刊ナーシング，22(8);92-101，2002.

６）**中村美鈴**：PEG患者へのインフォームドコンセントと「口」から食べられぬことに対する心理的援助．月刊ナーシング，22(9);26-29，2002.

７）竹田津文俊，**中村美鈴**：納得病態生理　クローン病・潰瘍性大腸炎・大腸がん．月刊ナーシング，22(9);92-101，2002.

８）**中村美鈴**，川﨑佳代子：子宮筋腫患者の看護，ナーシングカレッジ，6(16);24-37，2002.

９）**中村美鈴**：高齢患者が持つリスクを把握した周手術期看護　第１回虚血性心疾患を併存する高齢患者の手術と看護．月刊かんごきろく，12(6);50-57，2002.

10）**中村美鈴**：高齢患者が持つリスクを把握した周手術期看護　第2回糖尿病を併存する高齢患者の手術と看護．月刊かんごきろく，12(7);54-60，

2002.
11）**中村美鈴**：高齢患者が持つリスクを把握した周手術期看護　第3回呼吸器疾患を併存する高齢患者の手術と看護．月刊かんごきろく，12(8);69-78，2002.
12）**中村美鈴**：高齢患者が持つリスクを把握した周手術期看護　第4回低栄養状態にある高齢患者の手術と看護．月刊かんごきろく，12(9);58-64，2002.
13）**中村美鈴**：高齢患者が持つリスクを把握した周手術期看護　第5回術後せん妄を予防するための高齢者の手術と看護．月刊かんごきろく，12(10);75-81，2002.
14）竹田津文俊，**中村美鈴**：納得病態生理　高脂血症．月刊ナーシング，22(14);94-103，2002.
15）**小平京子**，**中村美鈴**：健康増進とセルフケア．小山市公開講座，2002年10月.
16）**中村美鈴**：医療と家族．白百合女子大学「女性とライフコース」，2002年12月.
17）**塚越フミエ**：臨床指導の原理．栃木県看護協会，2002年9月.
18）**塚越フミエ**：終末を迎えるために．小山市公開講座，2002年11月.
19）**塚越フミエ**：一日大学体験．石橋高校，2002年11月.

老年看護学

⑵　学会発表

１）水戸美津子，流石ゆり子，寺本希久枝，村松照美，斉藤和子，白岩洋子，神宮字たか子，**髙木初子**，広瀬昌子，斎藤好美，市川恵美子，渡部淳子，宮川智子：山梨県内における褥瘡ケアの実態調査（第1報），第10回山梨看護学会，甲府市，2002年7月6日（山梨看護学会誌10(1)　第10回学術集会講演録，2002）.

資　　料

2002年度（平成14年度）年譜

平成14年	４月１日（月）	自治医科大学看護学部開設
	４月５日（金）	自治医科大学入学式
	４月８日（月）	新入生オリエンテーション
	４月９日（火）	前期授業開始
	５月13日（月）	自治医科大学三十周年記念式典
	５月14日（火）	自治医科大学創立記念日
	７月30日（火）～31日（水）	前期定期試験
	８月１日（木）～９月30日（月）	夏季休業
	９月24日（火）～30日（月）	前期再試験
	10月１日（火）	後期授業開始・ガイダンス
	10月11日（金）～13日（日）	学園祭（第31回薬師祭）
	12月25日（水）～１月３日（金）	冬季休業
平成15年	２月25日（火）～３月３日（金）	後期定期試験
	３月18日（火）～20日（木）	後期再試験
	３月21日（金）～31日（月）	春季休業

教職員名簿

１．教員

職名	氏　名	主要担当科目
学部長	野　口　美和子	
教　授	川　﨑　佳代子	母性看護学
教　授	川　口　千　鶴	小児看護学
教　授	篠　澤　倪　子	地域看護学
教　授	髙　村　寿　子	健康教育論
教　授	竹　田　俊　明	人体の構造と機能
教　授	竹田津　文　俊	疾病と病態
教　授	田　口　ヨウ子	基礎看護学
教　授	永　井　優　子	精神看護学
教　授	永　嶋　フミエ	成人看護学
教　授	成　田　　伸	母性看護学
教　授	渡　邉　亮　一	保健医療情報学
助教授	神　山　幸　枝	老年看護学
助教授	小　平　京　子	成人看護学
助教授	西　岡　和　代	精神看護学
助教授	野　中　　靜	基礎看護学
講　師	朝　野　春　美	小児看護学
講　師	大久保　祐　子	基礎看護学
講　師	加　藤　晶　子	母性看護学
講　師	里　光　やよい	基礎看護学
講　師	曽我部　美恵子	母性看護学
講　師	髙　木　初　子	老年看護学
講　師	中　村　美　鈴	成人看護学
講　師	早　川　有　子	母性看護学
講　師	余　語　琢　磨	文化人類学
助　手	内　海　香　子	老年看護学
助　手	亀　田　真　美	基礎看護学
助　手	菅　野　こずえ	基礎看護学
助　手	木　下　珠　希	母性看護学
助　手	島　田　由美子	地域看護学
助　手	鈴　木　久美子	地域看護学
助　手	関　　澄　子	精神看護学
助　手	富　田　真理子	母性看護学
助　手	友　竹　千　恵	成人看護学
助　手	豊　田　省　子	基礎看護学
助　手	日　向　朝　子	精神看護学
助　手	村　上　礼　子	成人看護学

（各職名ごとの50音順）

２．事務部

職　名	氏　名
事務部長	榎　本　佳一郎
事務副部長	塚　原　則　男

（看護総務課）

課　長	桑久保　優
課長補佐	佐　藤　博
主　事	古　橋　信　枝
主　事	松　本　則　子
主　事	川　村　仁　美

（看護学務課）

課　長（兼）	桑久保　優
参　事	菅　俊　夫
係　長	三　上　博　史
主任主事	笠　倉　昇
主　事	松　本　恵美子
主　事	宮　田　弘　美

編　集　後　記

平成14（2002）年4月に開設された自治医科大学看護学部のはじめての年報をほぼ当初の予定どおりに発行することができた。これは，締め切りを厳守して原稿をご提出いただいた執筆者の方々や編集を担当していただいた編集委員の方々のご協力の賜物であり，深く感謝を申し上げる次第である。

本号は，看護学部が開設された2002年4月1日からの1年間の看護学部の各種の委員等の概要，各教育研究分野の教育ならびに研究の概要や研究業績をまとめたものであるが，これら以外に，野口美和子看護学部長，篠澤俔子教授，成田伸教授に特別報告をご執筆いただいた。それぞれ，本看護学部の理念や大学院構想，保健師の養成の柱となる地域看護学の教育，看護学部の教育のなかにおける臨床と学部との連携（ユニフィケーション）などをご執筆いただいたが，いずれも，これからの看護学部の教育や研究を進めていく上で重要な課題である。看護学部の教職員はもとより，看護学部の関係者の方々にもご一読いただければ幸いである。

創刊号となる本号は，量的にも，質的にも，まだ十分な内容とはなっていないかも知れないが，号数を重ねるにしたがって，より充実した年報へと発展させていければと考える次第である。

（編集委員長：渡邉亮一）

年報編集委員会

委 員 長	渡邉　亮一（自治医科大学 看護学部 保健医療情報学）
委　　員	竹田津文俊（自治医科大学 看護学部 疾病と病態）
	成田　　伸（自治医科大学 看護学部 母性看護学）
	小平　京子（自治医科大学 看護学部 成人看護学）
	水野　照美（自治医科大学 看護学部 成人看護学）
編集担当	松本　則子（自治医科大学 大学事務部 看護総務課）

自治医科大学看護学部年報　第1号

平成15（2003）年12月25日発行

発　行　者　　自治医科大学看護学部
　　学部長　　野　口　美和子
編集責任者　　自治医科大学看護学部年報編集委員会
　　委員長　　渡　邉　亮　一
発　行　所　　自治医科大学看護学部
　　栃木県河内郡南河内町薬師寺3311－159
　　電話　0285（44）2111㈹
印　刷　所　　㈱松井ピ・テ・オ・印刷
　　栃木県宇都宮市陽東町5－9－21
　　電話　028（662）2511㈹